

# わいふ

150号

## 特集 本音の子育て

座談会 / 母親たちは迷っている  
子育ては家庭の再建から / 丸木政臣  
特集投稿 / 閉じこめられた母親たち

わいふティーチ・イン / 主婦と呼ばれる私たち



書きたいひと  
考えたいひと  
知りたいひと  
怒りたいひと  
「わいふ」は  
あなたの雑誌です  
あなたの中にあるものを  
声にしてみませんか？  
あなたは 発見するでしょう  
同じことを  
考えていたひとが  
あそこにも ここにも  
いたことを  
そして  
みんなで考えるとき  
あなたは もう  
一人ほうちではない  
ということ



## 投稿規定

予約購読者(会員)は、どなたでも投稿できます。投稿は原則としてすべて掲載します。

- (一) 随筆・随想・テーマ自由  
千二百字まで。
- (二) わいふテーマイン  
特集テーマ原稿  
千二百字まで。
- (三) おしゃべり、その他  
五百字まで。
- (四) 持ち込み原稿は、形式、内容、長さ自由。ただし掲載は編集部で協議の上決定します。

「わいふ」は、会員の皆さまが創る雑誌です。しかし限られた紙面の都合上多少選択することもありますのでご了承下さい。

### 特集・本音の子育て

座談会・母親たちは迷っている……………	14
インタビュー・子育ては家庭の再建から / 丸木政臣さんは語る……………	24
ママ、さわってごらん……………	奥井登美子・32
特集投稿・閉じこめられた母親たち……………	高橋裕見子・34 ほか

- シリーズ詩の中の女 / 男と女のいびつな関係 …………… 駒沢 喜美・2
- 投稿随筆・たていとよこいと……………原真智子・原ゆう子・西山敏子・原弘子・4
- 生活の匂いとロマンを…………… 風間ゆり・30
- 継続ティーチ・イン / 専業主婦といわれる私たち…………… 鈴木由美子・7  
ほか



- お能拝見・付 心得帖…………… 和田好子・44
- 手のかからない鉢植②…………… 29
- わいふ情報コーナー…………… 43
- おしゃべり…………… 50
- 編集後記…………… 54

おきく

くろかみながく

やはらかき

をんなごころを

たれかしる

をとこのかたる

ことのはを

まこととおもふ

ことなかれ

をとめごころの

あさくのみ

いひもつたふる

をかしさや

みだれてながき

髪びんの毛を

黄楊つげの小櫛をに

かきあげよ

あゝ月つきぐさの



こひて死なんと

よみいでし

あつきなさは

誰たがうたぞ

みちのためには

ちをながし

くにゝは死ぬる

をとこあり

治兵衛はいづれ

恋か名か

忠兵衛も名の

## 男と女のいびつな関係

駒尺喜美

お七はこひの

ために焼け

高尾はこひの

ために果つ

明治二十年、藤村二十五才の時、最初の詩集『若菜集』を世に問うた。そこに収められた恋愛詩は、若者の心を強くとらえたに違いない。当時の道徳習慣からいえば（恋愛）は日陰者であったのだから、それを正面から謳いあげただけでも一つの衝撃であったであろう。

「おきく」は、『若菜集』の巻頭を飾る、「六人の処女」と題された連作の中の一つである。「おえふ」「おきぬ」「おさよ」「おくめ」「おつた」「おきく」というこの一連の恋愛詩を読んで、私が一番不思議に思ったのは、何故、藤村は男の気持を歌わずして、女の気持を歌ったのかという事であった。「おきく」のみわずかに違うが、他は殆んど女になりかわって歌っているのである。これは現在の流行歌に至るまでそうだが、恋心を歌うとき、作者は男でも女心を歌う事が多い。藤村はおそらく無意識でそうしたのであるが、恋愛を人生の真正面から取り上げながら、しかしやはり、それに真正面から取り組むのは、男ではなく女であるとの意識が無意識のうち

に働いたのだと思う。  
藤村は自己の失恋の傷手を深いモチーフとしていっていたが、それでも恋心を歌うと



# 女の中の詩

## その1

きえぬべき  
こひもするとは  
たがことば

ために果つ

あゝむかしより

こひ死にし

をとこのありと

しるや君

をんなごゝろは

いやさらに

ふかきなさけの

こもるかな

小春はこひに

ちをながし

梅川こひの

ために死ぬ

かなしからずや

清姫は

蛇となれるも

こひゆゑに

やさしからずや

佐容姫は

石となれるも

こひゆゑに

をとこのこひの

たはふれは

たびにすてゆく

なさけのみ

こひするなけれ

をとめごよ

かなしむなけれ

わがともよ

こひするときと

かなしみと

いづれかながき

いづれか

みじかき

(島崎藤村)

き、おのずから女として歌い出したというの  
は、なかなか興味のあることである。そこには  
恋は女のものであるとの現実が、はっきり  
刻印されている。「おきく」にはその辺の事  
情が、期せずして歌われている。男は道のため  
に血を流し、国のために死ぬ。だが恋死する  
男はいない。男の恋は「たはぶれ」であり  
「旅にすてゆく情け」でしかあり得ない。そ  
んな男を女は命をかけて愛す。このうす情け  
の男に厚き思いをかける女心を哀れがって、  
藤村は「恋するなかれおとめごよ」といつて  
はみるが、しかし自分が受けるとすれば、や  
はりお七やお夏のような命がけの女の愛を受  
けたい、そんな身がってな男心がこの歌には  
ひそんでいるように思われる。

男の人生は国、社会、仲間、仕事、遊び、  
家、妻、恋と広く開かれている。が女はその  
男に養われて生きるようにしむけられ、家の中  
に閉じ込められている。女はそのように閉  
塞的な状況におかれている故に、女の情熱、  
生命力はたった一人の男に向つてのみ吹き出  
す。その男と女の関係構造の不当さに、藤村  
はもろろん気付いてはいない。だが現在でも、  
このいびつな関係構造の不当さに気付いてい  
る人はそう多くはないのではないだろうか。



# 花福菓子

たていと  
よ二いと



## 四季の菓子

刈谷市

原 真智子

なすでもきゅうりでも一年中食べられるご時世です。暑い盛りに草もちがあつたり、秋でも柏もちを見かけたりするのに目くじらを立てる事はないのかも知れません。

でも和菓子には季節との結びつきがあつたはずでした。たまたま私の生家は小さな和菓子屋でして、結婚まではずいぶんと手伝いをさせられたので知つているのです。

まず、年が明けるとうぐいすもちを始めます。うつすらと掛

つた青きなこの色合いが店頭に出ると春が近いような気がします。次に、ひなまつりを中心に桜もちと草もちに力が入ります。それからお彼岸にかけて、おはぎが加わり、柏もちはそのあとになるのです。

青葉の頃から水ようかんとう葛桜を作つて夏に入り、涼感のある錦玉(きんぎょく)は暑い間のものでした。秋は月見だんご、新栗の出る頃は栗かのこと続くのです。ねり切りは、材料は同じですが、春は水仙に始まつて梅、桜をかたどり、菊や柿は秋にきまつていたものです。

もちろん、季節に特に関係ない大福やまんじゅうもあつて、いつも適当な品数が揃うようになっていました。

昨今は食生活が變つて、和菓

子は本当に影が薄くなりました。たまには作りたくなつて小豆あんのお菓子を作つても、息子たちはほんのお付合ひの程度に食べるだけ。和菓子に季節を感じてほしいという願いも無理のようです。

## 五歳のあなたに

東京都

原 ゆう子

隆光君お誕生日おめでとう。今、私は一人、ニヤニヤ。何となく嬉しくなつてくるのです。毎日毎日、洗濯機三ばい位の洗濯物をかかえ、毎日毎日嬉しくて仕方ないのです。

あなたが生まれたのは、私がまだ大学生の時。パパが会社から帰つてくるのを待つて、バトントッチ。あわてて通学する生活の中でした。午後九時すぎに帰宅すると、暗いアパートの一室で火のついたように泣いているあなたをみつけたこともあり

ました。また時にはお隣りのおばちゃんにあずけられたり。そんな生活の中で、あなたはいつのまにか人なつこく、おとなしく、大人受けのする子供に育っていました。

砂場へ行つても指先で遊び、家の中ではエンピツをおもちやにする。歩き出す前からそんな子供でした。「子供はこんなはずじゃない。もつと活発なはずだ」初めての経験であるばかりに、私はあなたをかかえてうろろするばかりでした。

そして二男坊の康隆君が生まれ、日毎にチビッコギャングに育ち始めたのに対し、あなたは対照的なチビッコ・ジェントルマン。

きのう、公園でドロまみれのあなたの手を引いて「さあ、おうちに帰つてお風呂に入りなさい。よく汚してくれたわね」つて笑っていたら、小さな女の子が「やさしいおかあさんね」と口の中で言っていました。本当は、食事のマナーについても、話し方についても、大変厳格な

私なのにな。

やっと思ひ切りドロだらけになれるようになったあなた。「本当は僕はもう大きいんだから水遊びしちやいないなだよね」なんて大人びた事言わないで、さあいつてらっしやい。ズボンがすり切れるまで遊んでいらっしやい。

私はまた一人ニヤニヤ、洗濯物を干しましょう。物干しにならないだ洋服は、ずいぶん大きめのものになりました。

今はなき

友によせて

東京都

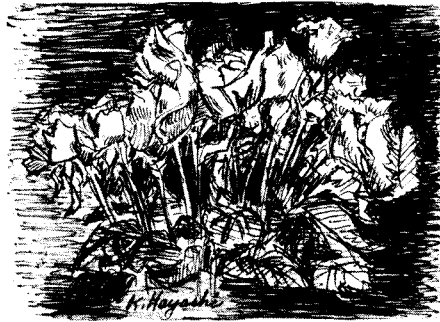
西山敏子(38)

二十年にわたり変らぬ親友であつた由美さんが亡くなつて早くも一周忌が過ぎ、自然は今その過去に何事も無かつたかのようになつて静かに時を刻んで行く。すでに早春、春の遅い日本海は今日も吹雪いているのだろうか。工合の悪いことは聞いてはいたものの、まさかそれが不治の病

「腸癌」とは知らず、五十一年七月未明、その死を知らせる電話はまさに私にとつて青天のへきれきともいふべき衝撃であつた。その日の午後取る物も取りあえず由美さんの住む、そして私にとつても故郷である新潟県M市に向い私は上越線の車中に在つた。車窓に流れる遠近のいつとも変らぬ風景を眺めていると無情の念が胸を締めつけ又今はは「思い出」というものになつてしまつた由美さんとのさまざまな二十年が去来する。共に高校に入學してからその相反する性格ゆえか、私たちは急速に親しさを増し、潮騒の聞える日本海近くの彼女の生家で、まるで姉妹のようにして青春の日々を過した三年間、誰からも好かれ、誰からも愛された貴女がこんなにも早くこの人生という舞台から去つてしまふなんて、そんな残酷なことがあつて良いのだろうか。あるいは私の人生の原点であつたかもしれない貴女、それらの全てが今、一瞬にして白い波間についでてしまふ

なんて、一人の人間の三十七年の懸命に生きた歴史を全て否定してしまふ「死」というものの冷酷さが深い戦慄となつて全身を震わす。

二人の子供を生み育て共働きしながら建てた自慢の家、その



中で貴女はまるで百年を一日で生きてしまつた人のようにさすまじく変ぼうし、私の見知らぬ他人のように小さく薄くなつて横たわつていたが、遺体となつてさえ尚、幼い二人の子供と病

母、御主人を残し会いたい人にも会えずあまりにも早いその生の終りを迎えねばならなかつた無念さが激しく私に迫るのである。「どれほど苦しかったことでしょう」「どれほど生きたかつたでしょう」「せめて生ある中にその無念さを共有し得なかつたくやしさと共に、もはや過ぎた時をこの両の手に取り戻す術もないこの現実が私を狂おしくする。

二月末の発病から壮烈な死を迎えるまでのわずか四か月、短い闘病生活であつたというその生涯で深く愛した母上の不調を氣遣ひ、自分の病氣に氣づくのが遅れ、すでに手遅れであつたことや、誤診、手術の不手際など医療水準の低い地方都市のこととはいえあきらめきれぬ不運であつた。

翌三十日、今を盛りと鳴く蟬時雨を葬送の曲に花々に囲まれて本当に貴女はこの地上より永遠に姿を消してしまつた。まだ母の死を理解出来ずに、人の集うのが嬉しくここにこして

幼い弟の手を引き、貴女にそっくりの口元をきゅつと引き締め懸命に耐えている聡明な姉、二人の遺児たちよ。これからの決して平らではない人生を強く生きて欲しい。貴女たちが大きくなった時語ってあげよう。私の心から消えることなく生き続けるあなたたちお母さんの懸命に生きた生きざまを。そしてこの世でついに休息の時を得なかった貴女、由美さん、どうぞ心安らかな眠りを得られんことを。生前の友情を感謝しつつ祈るのみで……。

## 私の読んだ本

東京都

原 弘子(45)

一四九号のたていとよこいとに投稿なさった川名様の、おもしろかった本、お勧めしたい本があつたらとのお声に多少なりともご参考になればと、筆を取りました。能無しの私は、唯本

を読むということだけは好きなのです。川名様の文面にとっても共感するものがありました。私の浅い読書歴の中から心に残っているもの、感動した本等思うままに書かせていただきます。

まず若い頃読みましたカミュの「異邦人」は、難かしいことは分らなかつたのですが、若い心にとても共鳴するものがありました。それから私は、結婚しまして子供が生まれ、二人の子供が、幼いうちは、川名様のように読書を致しておりませんでしたのですが、ある時「心の窓」という芹澤光治良著の随筆を読みました。その時は大変感動致しました。久し振りに本に接したせいと又、筆者のお人柄から来るものであつたのでしょうか。何か素晴らしいものを発見した時の様な喜びに、胸の高なりを覚え、本を抱いて読書の楽しさを再認識したものでした。最近ですと、二三年前になりました。モーパーッサンの「女の一生」を読みました。これは二度目なのですが、学生時代と違い

まして大変色々と考えさせられました。もう一度六十代位で読んでみたいと思つてます。又、詩情豊かで自然の描写がとても美しいのです。次に「ジェーン・エア」ですが、これは若い人に推されておりますが、中年の私にとつても、香り高い気品のある最適な小説でした。私が今通っている公民館での文学教室で取り上げられました本の中でよいと思ひましたのは「路傍の石」です。人を感動させるに充分な名作ではないでしょうか。又、環境問題として、勉強致しました有吉佐和子著の「複合汚染は家庭を預かる主婦として又、現代に生きる私達にとつても必読の書のように思えるのです。

最後にこれから私の読みたいものでは、ドストエフスキの「罪と罰」と、バルザックの「谷間の百合」です。

細い活字の見にくくなつた昨今、読書も思うようには出来ませんので、近いうちに老眼鏡のお世話になる予定です。

# 不思議な釣鐘

文・美森成生  
絵・藤川秀之



珠玉の民話集です。  
心にふるさとを取り戻す  
ゆたかな文・ゆたかな絵。  
贈答用にも最適です。

BOC出版部  
1800円



## がけっぶちの主婦論

府中市 鈴木由美子

私は二十七才、夫の転勤で共働きをやめ、今は一才過ぎの娘と暮らす専業主婦。これは「わいふ」を読みながらの自問自答である。

——「夫に養われている」なんて考えないほうがいい？  
——それぞれの夫婦の人間関係のレベルによるんじゃないかなあ。二人がとびきりの親友で共通の目的を育てて暮している夫婦と、夫と妻の機能を果たしてだけの夫婦とは全然違うから。ただ一方が、特に男だけが収入を得ている、二人が対等ではないとするならば、双方がよほど豊かな人間観を持っていて、精神的な結びつきをしっかりと保っていないと無理だったことは確か。

——私たちが結婚した頃、男ばかりの席で夫に「お前、これからタダでやれていいなあ」って言った人がいた

そうだ。自分の人間認識が疑われるとも思わず、無邪気な口調だったとか。男性達の間では女性の人格を尊重する文化が未発達だから、主婦が自分では夫と対等のつもりでいても、養われる代償として家事とセックスのサービスをする地位におかれる危険は大きいと思う。

——精神的自立と経済的自立の関係は？

——職業を持つについても、長いものに巻かれる生き方しかしていない人も多いし、二つをイコールで結べないけれど、関係がないとは言いきれない。私が自分の勉強代を毎月相当使っているのを夫は家計費の当然の支出と考えてくれているらしい。それでも共働き時代の実績がなかったら、もつと遠慮していたと思う。四方さんの文、個人の精神生活と経済力の関係をよく見抜いていらっしやる。

——それから経済なんかと関係なく精神は自立できるといふ人々の「自立」の中味が気にかかる。どうも自分一人がじつかりしようという精神修養にかたむきがちで、まかりまちがえば昔ながらの良妻賢母になりそうなあぶなさを感じてしまつて。

——じゃ、精神的に自立しているってどんな人？

——一口で言えないけれど、自分で人間にぶつかり、

社会とぶつかり、何かを創り出そうとしている人。義務感によつてではなく、好きだからやれずにおれない「仕事」をしている人。自分がせいっぱい生きているから、他の人を大切にできる人。偉い人のひきうつしでない、自分自身の思想を形成している人。そんなふうになれたらいいなあ。そういう「仕事」が職業だったらすばらしいけれど、無報酬とか持ち出しになる場合も多いみたい。

——子育てとかお年寄りの世話とか、主婦は行動の自由がとばしいけれど……。

——残念ながらその通り。こわいのはそういう束縛そのものより、孤立してくり返し仕事に埋没しているうちに、自分が何をしたいのか見失ってしまったて、そのうえ見失ったことさえ自覚できないほど心がマヒすることだつて気がする。コマ切れ時間をかき集めて、自分自身の個人的な意欲や社会とのつながりを確保しておかないと、束縛された状況を少しずつでも切り開こうという気持を持ってなくなってしまう。

主婦の生活って、がけつぷちを歩いているようなおそろしさがつきまとうものらしい。谷底にはまりこまないよう、気をつけなくっちゃ。

訂正とお詫び 149号八頁菊池一絵さんの名前は菊池の誤りでした。なお九頁最後はだかばら↓だからです。

## 思考の巾を広げよう！

千葉市 長田綾子

「わいふ」一四八号の継続ティーチ・インで、主婦の被害妄想ということが議論の焦点となつていいるが、これらを読んで感じたのは個々のいる状況の差ではないかということ。たとえ亭主閑白であつても最終的には思いやりがあり、信頼をもてる夫と過している人達はむしろ女の新しい生き方を叫ぶよりその小さな幸せを守りたいのが本音だろう。だが、根本的に古風な夫と暮している者達にとつては、封建思想との戦いは血みどろなものである。それらの利害の差のある主婦が、自分の立場で自己主張をすれば食い違ふのは当然である。なかには理解あるパートナーに恵まれながらも、なお自分個人だけのことでなく女性全体の幸せを考え、広い視野で運動をしている人もいいる。

私などは大変封建的な家風で育つたので、古さは美德という意識（たてまえ）で結婚した。しかし、あまりに夫との風通しの悪さから、反動的に女としての

自立意識に目覚めてきた。そしてそのささやかな努力は、夫の本質は変えられなくとも角を少しづつ削り始めている。

相模原市の長田和子さんは「お前を養っているんだぞ」と亭主が言ったら「今晚の夕食はおあずけです」と言えと書いておられたが、現実そんなことを言ったら、たぶん我が家では拳のあられが降るだろう。そんな呑気なことは言っていられないのだ。我が家は特殊であると思われるかもしれないが、類似したケースがないとは考えられない。皆が自分の個人的状況の上で主観的にものを考えず、客観的に女性全体の問題として考える透視力・想像力が必要だろう。現在幸福な人はその幸せにしがみついているのだろうが、明日にでも夫が交通事故でも死亡した場合、残された妻のあわて方を想像すれば、たやすくわかることだ。与えられている小さな幸せを信じて、自分だけは一生そんな不幸にはあわないと、無理矢理思いこもうとする人間の弱さを直視すべきだ。子供を保育所に預けて共働きをするのは、子供が犠牲になるというなら、夫が急死してあわてて女が一家を背負う悲惨さに比べたら、どちらが不幸か？ 日頃から女が仕事で社会と結びついていれば、不幸も小さく食いとめられる。

受身の小さい主婦の幸せを、吉武輝子さんは観音様の手のひらの上と表現されたが、突発事故にあわずと

も人間である限り、夫婦が一生続くという保証はない。現在の専業主婦という生き方を肯定する人は、不幸にめぐりあつた女性は宿命だから仕方ないだろうという考え方なのか？ 自分個人の事だけでなく、女性全体のことを積極的に考えていけば、それはいずれ何かの形で自分や自分の娘達に恩恵となって返ってくる、私は信じる。

## 死角に在る自由

東京都 亀山和枝 (30)

何かの必要で職業欄に記す時、私は無職と記入します。主婦は職業ではないからです。無職がその価値とされていると思うのです。空手で待機しよらず注文に応じる、何一つプロではないが凡てプロ並が望ましいアマチュアが私達主婦ではないか。内面としての主婦なら共働きの女性も充分その役を果しているが、主婦の存在は一家庭内を越える事が多い。

私は給与の集合住宅に住むが、一時上下二軒と隣が共働きであった。その結果五軒の小包み届け物等が、

私の手を経る事になってしまった。共働きに協力とか、お互い様とか思っても、幼児を抱えての事では生活が乱され、考え込むことが多かった。その名も「女が外に出るとき」で犬養道子氏がゴミ収集を例に記されていたが、家を空にすると何かと問題が多い。一軒の家には留守番が居る事を前提に社会が動いているのだ。共働きの家庭は——生活の為も多いのは承知だが——この点を考え、あとは野となれ……的な留守の仕方をすべきではないと思う。私も主婦も、生活方法の自由な選択の為に、良い託児所や労働条件と共にゴミ収集や小包み配達等のシステムについて、家に留守番が居ることが前提になっている社会のあり方にも目を向け、考えなければならぬと思うのです。

社会の動きは、無職よろずプロ並の留守番——主婦を当てにし乍ら、この主婦の夫に支障が生じると社会の厄介者とみなされる。交通遺児家庭もその不幸な例です。主婦は社会の一つの死角といえよう。ヒモ付きでない自由も有るが、見逃されていた代わり当にしていた事も見えないふりをされてしまう。恵まれた者以外、地縁血縁の希薄な勤め人家庭で一つの給与袋で暮らす事は片肺飛行も同様と思う。又、例えば家を夫と二人名義にするにも無収入の主婦は贈与税の対象になるといった事もある。尊い仕事の、収入に換算すればの話しばかりでその実、子供と同じで扶養されていると

しか見なされない。ボランティアで福祉の一角を支え、PTAの仕事をし、何軒分のゴミバケツの始末をし、家族のリフレッシュに努めてきても、夫なきは無職無収入のお荷物となる。社会が無職で待機する主婦を当てるのなら、せめて夫に支障の生じた時、再出発の為の教育等、暖く遇って欲しいと思う。よろず注文に応じるのが価値とは言えアマチュアの悲しさ造幣能力はないのです。

外に出る事は出来なくても一つの給与袋で何とか生きていられ、死角の自由を味わい生きがいがままで欲しいと言いつつ、その上あれこれの望むのはぜい沢と言われるだろうか。だが一寸先は闇では己の可能性など見つめる余裕はない。この死角に在る自由は長田さんの指摘の様に弱いのです。その代償は少し大きすぎると思うのです。

## 孤独からの脱出

東京都 子松志乃子

結婚してみて、とてもとまどいました。六年過ぎた

今も、慣れたというだけであって、まだそのとまどいがどこかに残っています。三人目の次女が一才を過ぎて、少しづつ外部、つまり社会と接触を持つことが出来るようになって、そのとまどいと正面きって向きあおうとしています。

主婦（特に専業主婦と呼ばれる私達）は、とても孤独な立場に置かれている。中でも幼児を抱えた主婦は何か一つのことをやろうと思っても、中途半端を余儀なくさせられます。会合に出席しても、動き回る子供と回りへの気がねで、それだけで疲れてしまい、とても話どころではありません。働く主婦の子供を預ってくれても、勉強したい人や、趣味などをやりたい人の子供を預ってくれる保育所はありません。それを言う「今は子育ての時期なのに、趣味だの勉強だのともない。おとなしく家にいなさい。あせることはないのよ、まだ若いんだから」と人は言う。けれど逆に子育ての時期だから二十四時間子供と顔つき合わせている時期だからこそ、社会とのつながりを持ちたいと思います。情報が氾濫している中で、本当に私達にとって必要な情報は案外不足しているのではないのでしょうか。

一年前の私は、三人の子供達の世話に追いまくられ、その上に途中から同居した姑達となかなかうまくつき合えず、毎日が忙しいけれど何か一つ充実感に乏しい

日々を過していました。引越したせいもあり、親子共友達がいずなにかしなくてはと思っていました。ある講座を受けたことがきっかけで、自主グループを作りました。小さいけれど仲間って本当に必要なんだと痛感しています。家族と少し距離を置いてみて、今までの自分の見えなかった部分を発見しました。姑の立場も理解出来るようになってきましたし、外へ出る時間を作ろうと、家事育児の合理化を計るようになってきました。結局自分一人で悶々としても、どう解決の道が開かれる訳でもない、思いきって飛び出すべきだと思えます。飛び出しているんな壁にぶつかるとは、行動せずには壁を知ることさえ出来ない孤独と想っているのは自分一人ではないと知って、もっと主婦たちは手をつながなくてはいけないと思えます。

## 「主婦業」は職業でない

岸和田市 小出久子 (32)

編集部「家事育児は立派で大変な仕事、養われて

いるなんて感じるのは被害妄想で、平等なんだからちつともひるむ必要がない”って言う主婦の声も多いのですが……。

持田Ⅱいくら女が観念的に平等だと思っても、現実にはイザ別れる時、子育て家事に専念すればする程困るのは女だ。男は困りやしない。(わいふ一四八号ニューファミリーとオールドファミリー)

この会話で主婦業である主婦と、その主婦業を観る外の見方が端的に表われていると思う。内から主婦業を観る目、外から主婦業を観る目のくい違いがここにはつきりと見えている。

一歩おのれを外に出し、主婦業を観る側から主婦業に目を向けてみたらどうだろうか。どんな姿が映じてくるだろうか。持田氏の「イザ別れる時困るのは女だ、男は困りやしない」の発言を否定できる主婦の人は一人とていないのではなからうか。この事実につかて目をみはり、見据えなければならぬ。この事実を目をつむり、夢想の中で生きている主婦業の人が多いのだ。そして「亭主を通してGNPに係している」(わいふ一四八号より)ことを自分が関係している如くに錯覚しているのだ。「通して」ということはあくまでそこを「通して」であり、直接触れるものではない。その宿主がなくなればおのれの感覚はないということだ。死ぬ、ということである。この死ぬ、ということに常におののきながらも、それが今でないという安堵故に

目をつむり、ほおかわりも可能というわけだ。いやな、決して愉快でない、おのれを認めぬ評価に謙虚に傾ける耳を持たなければ、主婦の価値も一人合点に終ってしまう。

專業主婦の年収はゼロである。いくら夫に対しての陰の力、裏を支えるものであることを主張しても、収入はゼロであることに変わりない。一方夫の年収は五〇〇万円である。この五〇〇万円に陰の力、裏の力があると力説してみたところで夫〇〇××の年収は五〇〇万円なのである。陰の力、裏の力がどうであろうと夫〇〇××は年収五〇〇万円であると評価されるのだ。夫を通じて”という力など評価の対象にはなり得ないという事実を目をそむけてはならないと思う。

私ももちろん主婦の一人である。專業主婦でもあった時期から現在は”主婦”でもある。体験を通して、主婦業は職業ではない、と考える者の一人である。それは人が生存していく上にはなくてはならない最低線の保証、仕事に他ならないからである。つまり、空気と同じではないか。これがなければ人間一刻も生きてはいけないものに金を支払うのであっては困るわけだ。それが”主婦業”としてあるのではないだろうか。こう考えてくると主婦業にそうもつた理屈をつける必要はなくなってくるわけだ。主婦の私にとって、主婦での仕事はさっさと片付けてしまふべき、片手間のものであつて職業とはなり得ない。



# 特集 本音の子育て



バラバラになった社会のなかで

バラバラになった家庭のなかで

母親たちは たった一人

子育てを背負いこんでいる。

母親はもう 強くない

母親たちは 迷っている

ここに響いているものは その母親たちの声

一人ぼっちの 母親たちの声なのです

# 迷っている



若月田鶴子

(中3女子・小5男子の母)



(高1女子・  
小6男子の母)  
和田好子

## 鈴木ひと美さんの投稿

我が家には、五才と三才になる男児がいます。長男は、四月から幼稚園に通っていますが、毎月の下旬には必ずといっていい程、病気で欠席します。もともと気管支が弱くて、疲労が重なってくると、熱を出し、咳をし、ダウンです。今までは季節の変り目に患う程度でしたが、園に通うようになってから回数が増えました。これは、私にも問題があるようです。

朝起きて、着がえをし、食事をし、歯みがきをして、スクールバスに乗るというリズムに、長男は、なかなかのりがりません。例えば、起きた時に、本を持ち出し、それを読んでしまうまでは動かない。絵を描きはじめたら、最後まで描かなければ動かない。折り紙も、失敗したら、もう一度やり直し納得の行くまでやりまます。私は、時計とにらめっこ。つい声を荒らげて怒りはじめます。怒られたところで、途中でやめるわけではなく、目に涙をいっばいたため、「今、どうしてもやりたい」と言います。夫は、「今どうしてもやりたいならやれ」と。私は仕方なく、ブツブツ言いながらあきらめます。確かにやりたい時にやるのが一番いいでしょう。でも、何も朝、この忙しい時に、やろうと

## 子を見ること親にしかず？

編集部 今日はこちらに掲載した鈴木さんの投稿をもとに、子育ての中で親がぶつかる最大の問題——子どもの自主性をどのように伸ばし、尊重していけばよいか、親の指導性をどの程度発揮すべきなのかという問題について、それぞれご体験から出た切実なご意見を伺いたいと思います。

鈴木さんは気楽に投稿して下さったらしいんですが、実はこの問題は子育ての中で親がぶつかる、一番大きな、一番深刻な問題だと言つてもいいと思うんですね。きれいなことでない本音のお話を伺いたい、と期待しています。

もつとも誰も自分の子育ての結果について、完全な自信の持てる人間はいない。ですから、結果については余り神経質に考えずに、ある程度棚上げにして……(笑)自分はこのいう考えでやってきた、というところに重点を置いて話していただきたいんです。

渡辺 子どもの自主性を尊重するやり方はいろいろあると思うけれど、やはり親が子どもを完全に知っているかどうかということ……それが先ず問題だと思うんです。子どもの性格を知らないで、間違つたしつけかた、間違つた叩き方



渡辺啓子

(浪人男子・中3男子の母)

## 特集座談会

# 母親たちは

齋藤美佐緒

(大2男子の母)



思い立たなくてもいいと思うのです。余裕を持って、朝、出かけてほしいのです。規律正しい生活を、私は長男に押しつけようとしているのです。

園生活自体は楽しらしく、帰宅後、目を輝かせて、話したり、歌ったりしてくれるのです。とすると、多少、スクールバスに乗り遅れても、やりたい時にやり、その満足感を味わい登園することにした方が、私もイライラしなすむことになるのです。そうは思っても私自身の性格が、なかなかそれを許しません。

これは何も朝のことだけではないはず。一日の生活すべてにおいて、長男は、もろもろの圧迫を感じ、それが積み重なって、病気になるのでしょうか。

先日、新聞で「家庭で祖父母のできる教育は、人間にとつて寛容はいいものだと子どもに知らせることだと信じている。」(松田道雄氏)という文章を読み、反省している次第です。夫のいう、母親らしき母親、大らかな母親になるべく努力しようと心に決めましたが、それだけでは心もとなく、公表させていただきました。

子どもを育てるってこと、本当に難しいと、痛感しています。

をしていないかどうか……。

私自身、子どもの教育とか育てかたについては人一倍関心の深い親だった。でも結果的には自分の子をほとんど理解していなかったんだというのを、ある事件で去年、痛切に思い知らされて……いま深刻に反省しているんです。

**編集部** どういう方針でやっていらしたんですか。

**渡辺** ともかく基本的なしつけは身につけさせたいということ……とくに父親がきびしかった。靴の脱ぎかたとか、戸はきちんと最後まで閉めろとか。食事の時ヒジをつけて食べるとパインと叩くので茶碗がとんだことなど何度もありましたね。

**編集部** 渡辺さんご自身は？

**渡辺** 片方が厳しいと片方が取りなすようになりがちで……でも目の前で取りなせば当然私まで怒られちゃうから黙っているという形になっていましたね。だから結果的には二人とも同じ方針だったということになるでしょうね。

**若月** 幼児期、小学校、中学校時代と成長の段階で親のきびしさの内容も段階的に違ってくるはずでしょうか？ おたくの厳しさは高校まで続いたんですの？

**渡辺** それがね、上の子が中学一年の時から四年間、仕事の関係で主人が家にいなかったの。

その時の子どもの荒れかたがひどかったんですね。強い性格といえないこともだから、弱いなら弱いなりに、大人になるまで突っかい棒になってやる強い存在が周囲にいた方がよかったです。じゃないかとも思いますね。

ともかく私に向ってひどく反抗するようになった。私の方も簡単に折れるべきではない、と思っていたからすぐくやり合いました。

若月 こどもって自分の感情をコントロールできなんでしょう？ 子供が親にパンと当ってきただとき、親がパンとそのまま返すのはどうかしら……それを一寸ね、一回転してから返してやるということが必要じゃないでしょうか。

## 親にも適性がある

斎藤 私はね、親にも適性があると思えて仕方がないの。こどもを持たなくても母親の才能のある人はいるし、私みたいに母親でもダメなものもある。(笑)

今にして思うと、いいとか悪いとかいってしつけるのではなく、もっと自分をありのままに出して、ママはそんなことは嫌いだとか、好きだとか、そういう表現をとればよかつたんじゃないかな、と思うの。それがね、それはいけなとか、間違っているとかいう教育的なもの

言い方をしていた。こどもには抵抗あったんじゃないかと思うのよ。

うちの子も高校時代すごく荒れたんですよ。つくづく考えるとね、私がいちということがこどもにとつてマイナスだったのでは、と思えてならない。例えば何か言いたいことがあったとき、ぐつと抑えて次の日まで待つてみる。そうすると言わなくてもよかつたんだということがすごく多いのよね。

一番悪かつたことは、建前と本音が違っていたということ。建前ではこどもの自主性を尊重しなければと思いつながら、本音ではキチンと守るべきことを守ることもであつて欲しかつた。もし自主性尊重なんていうなら、命の危険があるうと、社会的に脱線しようと干渉しない、ぐらいの覚悟が親になれば。口先だけの自主性尊重なんて何の役にも立たないのよ。のべつ幕なし干渉した方がいい位よ。(爆笑)

いい母親であらねば、と一方で懸命に思いながら、一方では干渉したい気持ちを抑えかねて自分の中で分裂状態を起こしていたのね。

若月 おたくは一人っ子でしょ。二人目になればその経験を生かせたんじゃないやありませんか？

和田 いや、そうとも限りませんよ。うちは上の娘の場合、親が緊張しすぎていて、可愛がりが足りなかつた。それで二番目の方は、添寝

したりしてうんと可愛がつたの。たしかに可愛がると子どもの情緒は安定する。毛布をしゃぶるとかノイローゼ的なところはなくなつてね。しかしそのかわりに娘の持つような自主独立の気概がなくて、やつぱり一種の甘つたれになりましたね。

主人の母がよくいうことだけけど、育児には極端は禁物、というのは本当だと思えますね。

たしかに母親がいると害悪になるといふことはあつてね。私は十一の時母に死なれて、それまでは過保護で、食物の好き嫌いはある、体は弱いという状態だったのに、親が死んだら二年たらずですつかり丈夫になる、生活能力はつく、という状態になつたわね。

斎藤 だから干渉すまいとぐつと後ろに下がつてみせるんだけど……ぐつと下がつてみせているんだゾというところがまた子どもに伝わるのよ。(爆笑) 倍ぐらいの威力になつて伝わるんじゃないの。全く自分を捨てきらなければダメ。

遠辺 私ごとき母親がぐつと下がつてみせたつてやつぱりダメよねえ。

若月 私はね、母親はこどもの発達に応じて下がるべきだと思うの。例えばトイレの躰にしても、初めは全部親がやってやるでしょ。次はパンツを下げてやる。最後は一人でできるという

ふうだね。今、上の娘は中三ですが、もう私がいなくても彼女は一人でやっつけている。でも下の男の子は小学五年で、まだ親が必要な面が多いですね。

子供がいつ親から離れるか、去年までは膝に乗ってきた子どもが乗らなくなる。その時はどんなに親が抱きしめたいと思っても、自分の気持を抑えなくてはね。もちろん対話は大切だけれど。またその対話のためには食事の時テレビを見ているような家庭じゃダメなんで、そういう対話が成立するような家庭を作っていかなくっちゃ。さつき親にも適性があるって仰言ったけど、親になるのは誰でも、テストなしになれない。だから適性を云々するより、やはり一人一人がいい親たるべく勉強しなくちゃと思うのよ。  
**渡辺** 適性ないから母親やめる、というわけにはいかないけど、でも子どもの内面をどこまで親が見られるかという問題があるわね。  
**若月** そこまで見る必要はないと思う。

**渡辺** 私だって勉強は随分している。しすぎるほどしてるのよ。(大笑)  
**斎藤** 今思うと私もそれがいけなかったんじゃないかという気がするの。勉強はしてるのよ私も。むしろ勉強のしすぎ。

さつき甘ったれになったって話が出たでしようちでは随分大きくなるまで子どもが私のベツ

ドに入ってきたがった。ところが当時の風潮が自主独立の子どもを育てようというのですね、各自に子供部屋を与えようとか。それで自主独立の精神を養わなくちゃと、私はそういう彼を追い返していたわけ。あの時甘やかしていれば情緒不安定の子にならなかつたのではないかと。  
**和田** でもね、情緒さえ安定していればいいというものでもないと思いますよ。

たしかに子供の性格を知ることが大切だと思うけれども……うちの場合も上と下では全く違う。上の子はすぐくちやっかり。親がおせんべいを何枚持つてるかなんて、一目で見分けちゃう。栗ひろいに行けば食べきれないほど拾って帰る。他の子が一つ二つしか拾えないなんていう時にね。下の子の方は現実的にはむしろ能力がない。不注意で自動車にひかれかけたり。そのくせ正義感が強くてケンカばかりしている。主人があいつ今に赤軍派になるぞっていう。(大笑)

こんな風に違うんだから親もそれぞれ別なやり方をしないとね。やはり基本的には観察と、それから納得ずくということだと思えます。

もう一つ、親の価値観を子どもに押しつけるにしても、それが相当長期にわたって子どもの批判にたえるものでないと、結局親の権威失墜ひいては大人全体に対する不信を招くから、大

## 地域別名簿について

地域別名簿作成の手伝いを申し出て下さったかたの中から、地域的に近いかたがたにお願した結果、練馬区の北村七重さん、杉並区の北川洋子さんおよび北区の鈴木達子さんのお三人が作成の責任者になって下さいました。

手書きで版下を作りそのままプリントするという方法ですと、思ったより安く二百円前後で出来そうですので、わいふ51号と一緒に、予約購読者の全員のかたに一括発送致したいと思えます。同じ団地、同じ官庁の宿舍などにいらつしやりながら、お互いにご存知ないかたも多いようですので、思いがけない友人の発見の楽しみや、地域サークルの発達のきっかけになるのではないかと期待しています。ただし有料の名簿ですので、太田区の方のように名簿は不必要、とはつきりお考えの方は、三月二十日まで、お手数ですがその旨ハガキでご一報下さいませ。ご連絡のない方は名簿ご希望として、51号とともに送らせていただきますのでどうぞよろしくお願い致します。

編集部

人からものを学ぶという姿勢が子どもになくなって、非常に困ったことになる。

**編集部** それこそ赤軍派になっちゃいますね。  
**渡辺** だから細かいことはむしろ言わない方がいいんじゃないの。

**編集部** 親子の間で意見の食い違いがあった場合、どうしたらいいと思いますか？

**若月** 子どもが独立する年令ならともかく、最後の決定は親が下すのは当然だと私は思いますね。もちろん話し合いはよくするとしても。

**和田** さあどうかしら、やはり子どもがそれを納得しないと、ダメだと思う。

例えばうちの子に、お小遣いの額なんかを納得させるにしても、娘が小学校で百分率を習った時分から、私はうちの家計簿を娘に公開してきましたんですよ。そうすれば子どもも納得しますね。ただわが家の欠点はね、子どもに規律のある生活をさせたくとも、親が時間的にだらしない生活をしているということ。これじゃあなかなか、子供をきちんと躾けることはできない。

## 躾けにほしい展望

**編集部** 投稿の話にもどりますが、チャンとした時間に幼稚園に行かせたいと親が思うのは、ごく当り前の考えだと思えますけれどね。

**和田** ただ、その思いかたに深淺があるとい



うことなんですよ。これからの生活の中で、子どもにとって、きめられた時間にどこそこへ行くということがどれほどの重要性を持つかというところに、親がはっきりした展望をもっていないと……大した信念なしに、誰かにいわれたからとか、先生に叱られるからとかいうことぐらいただと、子どもから反撃を食らったとき、親は忽ちぐらついちやう。

**若月** その通りですね。

**編集部** 自分の子どもの素質がつかめていないのに、社会的な枠を取らばらって子どもを育てるということ、自主性を育てるとか間違いしている親が多すぎるんじゃないでしょうか。

**和田** たしかに、親の用意した枠が一向役に立たなかったという場合もありますけどね。主人の母は戦時中の体験から、どんな生活でも暮して行ける逞しい人間にということで子どもを育てた。だからうちの主人は汚いものでも平気で食べちゃうし、あたりが汚れていても平気。ところがそんな能力はこの平和時代に一向に役立たないのね。パパは泥足でお風呂に入る、汚くついでいやだと娘に嫌われている。

**渡辺** だから私は親の見通しなんか、いかに無益なものであるかと言いたい。子どもの性格だつてどこまで分っているか、私自身、ついこの間までうちの息子を大らかで鈍感な子だぐらに思っていたんですから。それが全然そうでなかった、という事は親の眼がいかにか節穴かという事ですすよ。

**斎藤** 人間というのはそれほど分らないものだということを親も知るべきでしょうね。家の子はこうだとかああだとか、軽率に結論を下すべきではないわね。

**編集部** でもねどんなに話し合ってみても、子どもにとって親というのは結局は管理者、圧制者だということじゃないでしょうか。子どもはそこから脱け出して独立するのを喜ぶのが自然じゃないのかしら。友だちには話すことも親には隠すのが子どもだと思っただけでね。



**渡辺** ただどんな人間にせよ、どんな時代にせよ、集団の中で生活しなくちゃならないということ、これはたしかでしょう。だから時間を守るということは身につけさせなくちゃあ。そういう基本的なことを身につけたら、あとは余りああだこうだ言わない方がいいと思うのね。

**和田** しかしねえ、こどもがまだまだ小さい時に、自主性自主性といって大人がこどもの判断に任せるということは、こどもにとってはとても残酷なことなんです。結局親が自分で判断する責任から逃れるために、自主性という口実のもとにこどもに責任を押しつけるということが多いんだから。たとえ間違っているとしても、こどもが小さい時には親が子を支えるということは絶対必要なことだと思いますね。大きくなってきたら話は違うけれども。

### 躰けは自主性を損う？

**編集部** 戦後の傾向として、親がインテリであればあるほど、自分の考えをこどもに押しつけるのに懐疑的になるといふことがあると思うんですね。親の考えで子どもを躰けることがこどもの自主性、自発性を損うというふうにかえられていると思うんですが。

**若月** 昔の親のほうが、淳朴だったわね。



**和田** 淳朴というより、世間に通用するルールがあつて、親の権威は世間の権威を背負つて成り立っていたんですよ。

**齋藤** 社会全体にルールがあつたわね。男は男らしくとか、大きくなったら軍人になるとか、女はおヨメさんになるとか。

**和田** 価値の基準が固定していたから、親は楽だったんですよ。戦後はそれがメチャクチャになつちやつたから、親に自信がなくなつてしまつた。

私の母はね、私が大きくなってからも、女は丸マゲを結び、キモノを着て暮らすという生活が変らないと思ひこんでいたの。ところがかか

りつけのお医者様はね、いやこの子が大きくなる頃はみんな洋装になる、といつて種痘を足にしてくれたわけ。(笑)彼の方がずっと見通したしかだったんですよ。

**齋藤** でもどんな時代になつても、自主性をもつて自分で自分の針路をきめることの出来るような人間に育つてほしいという親の願望は変わらないんじゃないの。

**和田** いや、それも時代によりますよ。

**齋藤** それは戦前はそうじゃなかったかも知れないけれど、これから先は、親のこの望みは不変なものと言えるのじゃないかしら。どんなに世の中が變つても、これだけは變らないと思つけれど。

**和田** それだつて分りませんよ。

親の願ひなんてね、世の中の思想から独立独立歩のものなんかじゃ絶対ないと私は思っているの。世間から影響を受けざるを得ないものでね。現在のよくな世の中だからこそ、自主性尊重などと言われているんで、社会がそういう人間を要求していることなんです。世の中が變れば、自主性のある人間がいつも尊重されるかどうか、これは何とも言えない。

**齋藤** でも、育児の最終目標はそれしかないんじゃないの？

**和田** もちろん私も、自立できる人間というこ

とを目標にして子どもを育ててはいるんですよ。娘にも、経済的、精神的に自立できる人間になれ、と言いついてはいるし、娘もその気になっているけれども、彼女が成長したとき、現在の男女差別の世の中であつてそのために苦しむかもしれない。

他のことでもね、世の中が思ったほど変らなかつたり、あるいは考えていたよりずっと速く変つてしまつて、親の見通しが外れるということとはあると思うんです。

しかし問題はね、見通しがつかないからとかあるいは自主性に任せればいい、とかで、親が自分の子の教育から手をひいてしまつたら、親子関係はまったく違つたものになるだろう、ということだと私は思うの。

**編集部** それはどういう意味ですか？

**和田** つまりね、子どもは、自分にとつて親はただ無責任な人間に過ぎなかつた、という印象を持つてしまうだろうということ。親はやはり自分のことについては責任を持つべきだと思ふ。

**若月** でもね、子どもが親に持つ感情つていうのは、自分が愛された、という記憶が一番つよいんじゃないかしら。親の意見に反撥したり、權威に反抗したりするけれども、最終的に残るものは、自分を愛してくれた親の愛情の有難さ

だと思ふんだけれども……。

**和田** ウン、そうねえ。

**若月** 最後に残るものはそれでしょ。あの時の親の見通しは正しかつたとか、あの意見は間違つてたなんていうことよりも。たとえばどんなにその時それに対して反撥したり、反抗したりしても、自分を愛してくれた親の気持、それに対する感謝の念は残るんじゃないかな。いやそれしか残らないと私は思うの。

### 創造性をつくる教育とは……

**若月** さっきの投書の話にもどりますけれどもね、このお子さんもしかすると非常に特殊なお子さんかも知れないと思うのね。特殊なものを持つている子かも知れない。

日本の教育というのは、ある程度の常識人を育てるといふ線が非常に強いでしょ。枠からハミだした芽は摘まれちゃうということはある。

足かけ七年、アメリカにいましたけど、あちらの教育でたった一つだけよかつたことは、枠からはみだしたもののよさを伸ばすということなんです。だからこのお子さんはあるいは、試してみなくちゃいけないお子さんかも知れないと思うの。

**和田** ウーン……しかしそれは非常に危険な線

だと思ふのね。

世間一般の枠からはみ出しても自分の創造力でやつていける人間つて、そんなにいるものじゃないし、またそれほど創造力の強い人間だつたら、親が必死で枠の中に入れようと抑えつけても、どうしてもはまり切らないんですよ。高杉晋作やマーク・トウェインの話読んでも分るけれど、親がどんなに矯正しようとしても、絶対ということをきかない。天才なんて、そりや大変なものよ。逆にいえば、親が時間通りに幼稚園に連れていったために摘まれてしまう創造力の芽なんて、創造力の中に入らないと思うのね。本当の創造力、本当の個性なんてそんなもんじゃない。抑えつけようとしても、どうにもならないものなのよ。そういう強烈なものを持つてる人間なんて、何万人、いや何十万人に一人でしょう。ふつうの人間だつたら、キチンとした生活が出来ないために、あたら持つていける才能も伸ばせないという結果になる方が多いんじゃないですか。

**若月** ああ、聖心の心理の先生から聞いたお話ですけれどね。親は子どもの性格をあだこつうだと批判するけれど、結局そういう子を作つてしまふのは親だ、というのね。たとえばデータをとつてみると、第一子の場合、第二子の場合よりも、親がベッドのそばに行く回数が六倍

も多い。一事が万事で親のやり方によって、長男の、次男的性格がつけられる、というわけ。

それともう一つ、今子どもが行っている学校の先生のお話だけど、親が本当にこういう子にしたいと思つたら、そうなりますよ、と仰言るの。例えばあるお母さんが自分の子を何とか男らしい子にしたいというので、先生がそのように指導されたら、生徒会長もつとめて、お母さんの望むような男らしい子になった。その代り二浪したけれど、というわけ。だから大きな展望をもつて親がこういう子にしたい、と思つたら絶対それはできますよ、と仰言るの。もちろんそのためには生まれた時からその展望の下にチャンと手をうっていく、ということ。そうすれば必ずそういう子になります、つておっしゃるわけ。

(一座騒然)

渡辺 反対だな私は。大反対だ。

編集部 子ども性格を見極めて、あらゆる条件を考へて、原因と結果を追究していけば、ある程度できるでしょうね。何から何まで超人的な読みをもつてそうすればね。だけどそんなことがふつうの親に出来ることですか。人間業ではできないですよ。

渡辺 そうよ。人間を盆栽みたいに考へてね、日当りのいい所において一日何回水をやる、と

岩波新書「性格はいかに作られるか」に興味深いデータが出ていました。ご参考までにここに一部を紹介してみます。みなさんそれぞれ思い当ることがあるのではないのでしょうか。詫摩武俊著です。

母親の態度と子どもの性格の関係		長幼の序による性格の相違			
母親の態度	子どもの性格	兄	弟	姉	妹
1 支配的	服従 自発性なし 消極的 依存的 温和	責任感 が強い	冒険的	ものし ずか	甘つたれ
2 かまいすぎ	幼児的 依存的 神経質 受動的 臆病	ずぼら	反抗的	暖かみ がある	おてんば
3 保護的	社会性の欠如 思慮深い 親切 神経質でない 情緒安定	寛容	活発	思いや りがある	ちゃっ かりや
4 甘やかし	わがまま 反抗的 幼児的 神経質	指導的	わがま ま	やさしい	わが まま
5 服従的	無責任 従順でない 攻撃的 乱暴	気前が いい	がむ しゃら	控え目	活発
6 無視	冷酷 攻撃的 情緒不安定 創造力にとむ 社会的	思慮 深い	解放的	落着き がある	しつと ぶかい
7 拒否的	神経質 反社会的 乱暴 冷淡 注意をひこうとする	いばり たがる	粗雑	おせっ かい	おしゃ べり
8 残酷	強情 冷酷 神経質 逃避的 独立的	神経質	衝動的	親切	早熟
9 民主的	独立的 素直 協力的 親切 社交的	無口	軽はず み	温和	明朗
10 専制的	依存的 反抗的 情緒不安定 自己中心的 大胆	意志が 強い	強情	慎重	楽天的

いうのならそんなことも出来るわよ。だけど子どもは自分の足で歩いて行くもの。一寸あっち行けばお祖母さんに出っくわす。そこでもう違う経験をするでしょ。もつと大きくなれば外で、学校で、どんな人間に会うか分らない。そういう色々なフアクターがあるのに、今みたいなことが出来ると思ってるのは、教育者の傲慢だわ。だったら教育者の子どもは全部よくなってるはずでしょ。(爆笑)

**和田** その先生子どもじゃないの。(笑) そりゃね、たしかに親がこうしようと思うとそうなる子もいるのよ。

**編集部** いますねえ。

**和田** ところがうちの子なんか、親が右向けと言ったら左向いちやうでしょ。そういう子のことはどうなのかしら。

**若月** たしかに親ばかりが環境ではないことは事実ですね。だから親としては、子どもがよい出会いに恵まれますようにと祈るほかはないわね。それとよい本を読んでほしいということ。本もまた出会いの一種ですもの。

## 観察と情報の必要

**和田** この投書の件に限って言えばね、親が判断を急がない方がいいと思うの。何か迷うこと

にぶつかった時は、余り性急に判断しないでまづいろいろな情報を集めてみるのが先決じゃないの。

**斎藤** それと、本当に自分がやりたいことがあって幼稚園に行きたがらないのか、あるいは幼稚園に行きたくないから何かを始めるのか……。

**和田** 少なくとももう少しミツに観察することとは必要ですね。それとも一つ、この家庭自身が時間構わずの生活をしているのかもしれない。それだと子供も時間に合わせた生活ができなくなりまますよ。うちがそうだったの、全く。

**斎藤** うちの子は、三年保育の幼稚園に入れたいたんだけれど、とても行くのをいやがったのね。園に様子を見に行ったら、二年保育の子と一緒に、色々なお遊戯やらされていたの。さあお歌うたって、手を叩いて、なんて言われてもポカンとしている。早生まれだったし無理もないんですね。それで思い切つてやめさせてしまつて、次の年、二年保育に入れ直しました。

**和田** そういう場合の親の決断は大事ですね。だから、お父さんがこういつたから幼稚園に行かせないとか、自分の気持で行かせたい、なんていうことでなく、客観的に観察して、結論を出すことが大切だと思うの。そのためにはお母さんが家に閉じこもっていたんじゃないやダメなんだ、教育懇談会とか、そういう集まりに出て、もつ

と情報を仕入れるようにしないと……。

**渡辺** しかしね、この投書にあるぐらいの悩みや迷いは子育ての中で皆ある程度ぶつかることじゃないの。本当に重症だったらもう少し何か他の症状が出てくるのではないかしら？

**編集部** そうでしょうね。

**和田** あのね、個性を伸ばすということは、きまりを守らないということと同じじゃないのよ。獨創性があればだらしなくてもいい、つていうもんじゃない。ましてだらしなくさせれば獨創性が伸びる、なんてことはないですよ。

**斎藤** こどもの性格の先天的なものを変えられないわね。

**和田** というより、どこまで変えられるか、変えられないものかの見通しをつけるのがむづかしいのね。うちの亭主はすぐくだらしないんだけど、この頃私がやかましく言うようになつたら少し直つてきた。(笑) まあこんな部分なら変えられるんだけど。

**渡辺** だから大人になつてから直せる面なんかは、自分で自発的にやればいいと思うのね。そこを見越して親が何から何まで自分の思うようにお膳立てをしてやるなんていうのは絶対反対。

**和田** それは賛成。つまり自主性とか自発性とかいうけれど、要するにこどもに養つてやらなくちゃならないのは、自分で自分をコントロール

ルする能力、自立性ということだと思ふの。それさえあれば大丈夫なんじゃない？

**編集部** 完璧なお母さんの子に時々自立性のない子がいますものね。

**和田** つまり親が何から何までお膳立てしてやれば、親の支えがなくなると子どもは倒れてしまう。逆に自発性を養うというので放任しておけばやはり自己コントロールの能力がつかないんですよ。

## 親の愛情とは？

**編集部** さつき若月さんが、子どもの心に最後に残るのは親の愛情だとおっしゃったけれど、本当に子どもを愛している親は案外少ないんじゃないかと思うことがありますね。

**渡辺** そんなことはないでしょう。親なら誰だってわが子の一生涯懸命になる。憑きものがついたようになるんじゃないの。うちなんか主人も私も性格的にのめりこむ方だから、ますます子どもの領分を冒すようになっていく。

**和田** いえね、つまり本当に愛していて憑きものがつくケースと、そうでなくて憑きものがつくケースがあるんですよ。例えば世間体とか、親の虚栄心とか、そういうものにとり憑かれてる場合はあるわね。

**編集部** 自己愛の変形ですね。

**和田** 一人の人間としてでなく、自分の利害に結合した存在として子どもを愛していると思ひこんでいる人はいますね。

**斎藤** 私はね、周囲の情報にふりまわされて、ああでもない、こうでもないってウロウロするのが一番わるいように思うの。ともかく、自分がこうと思ったらその方針でやる。あとで、あああの時は間違っただなアと思っても、それは自分のえらんだことだからあきらめがつくと思うのね。本に書いてあったからとか、えらい先生に言われたなんていうことで右往左往するのが一番いけないと思う。

**和田** さあどうかなア……やはり情報はいれなくちゃいけないんじゃないんですか。でなければ、親は自分の勝手な考えで子どもを教育してもいいということになってしまいませんか？

**渡辺** 迷う、ということは必要んじゃないの。それもただ本を読んだり、人の話をきいたりするんじゃないでねえ、親もそれによって変わっていかなければいけない。要するに自己変革がなければいけないわけでしょう？ はじめから同じで、全然変らない人間なんて意味ないんだから……だからやはり子育て最中の親だって、迷ったっていいんだし、変わる必要もあるんだと思ふ。

私も家の中だけにいた時は、自分は結構有能だと思っていたし、実際家の中をとりしきることや、PTAで活動する位のことには十分やっつけていたのね。だけど勤めに出るようになって、子どもにのめりこまなくなったら、自分の能力の限界も分ってきて、前のように絶対者として子どもに向き合えなくなってきたんですよ。結果的にかえってそれが子どもにとってよかったみたい。

**編集部** どうしましょう。この座談会、どうしめくくつたらいいかまるつきり見当がつかなくなりましたよ。(笑) (まとめ田中)

## 一 報告

第一回わいふ不要品交換会は一月三十日盛況の中に終了しました。

御出品売上げ 二八五、〇〇〇円  
寄附品売上げ 一七、九五〇円

ご出品の売上げから二割を編集部にカンパして戴きました。厚く御礼申し上げます。新品同様のセーターが五百円、毛皮つきブーツが千円など、お買得品がかずかずあり、皆様に喜んでいただけただけです。

ご協力下さった皆様有難うございました。

# 子育ては家庭の再建から

## ——丸木政臣さんは語る——

**編集部** 今日、「わいふ」の会員からの投稿と、それに基づいて行なった座談会をもとに、お話しを伺いたいと存じます。

座談会の最後に、皆で言い合ったことは、非常に教育情報がたくさんあった、情報過多だったということです。それにふりまわされた気味がありまして、ことに自主性尊重型のお母さま方から、そういう反省が出ました。とにかく、子どもにとつてよいといわれることは、みんなやってみたって感じて……（笑）

これははたして母親だけが悪いんでございましょうか？ 情報の受け取り方が悪いとか、ふりまわされるなどか、母親ばかり叱られてきたように思いますが、果して情報は正しかったのでしょうか？ 戦後は教育論に対立や論争もあったようにきいておりますが、そんな状態の中で何を信ずべきか、私どもとしては辛いところなので、一方的に悪いといわれるのは納得がいきません。

きつとおくわしいと存じますが、戦後の教育論と、マスコミとの関わり合い、マスコミに流れた段階で、それが歪められなかったか、ということをまずお話しただき、それから母親の情報への関わり

方について……母親も悪い面はもちろんあるでしょうから……アドバイスをいただけたらと存じます。

**丸木** なかなかそれは……むずかしい問題ですからね。とつきには私も考えがまとまりませんけれども……具体的に、幼稚園へ行く時間になっても、他のことをして行かない子にどうかかわるか……ということから申し上げていきますとね。

幼稚園にもかなり質のよしあしがありますから、ごく悪いところ、先生があまりにも強い管理統制を加えて、子どもの集団もできず、ちっとも楽しくないというような園は別として、ふつうの園ならば、四、五才の子どもは家にいるより行った方が楽しいものなんです。なぜならばそこには遊びの集団があります。年令の近い同志の遊びというのは、非常に子どもにとつて魅力があり、どんなに大人が遊んでくれても、その肩代りをするとはできないほどのものなんです。もしそのお父さんに、お子さんが幼稚園へ行かないで本を読んだり、絵をかいたりすることの方が、創造性を高めるといふうなお考えがあるんだとしますれば、こ



れは非常に伝統的な日本の教養に対する考え方で、私はまちがいだと思うんですね。集団の中で鍛えられることなしに、創造性を発揮することはできないと思います。

そのお子さんの場合は、むしろ園に行きたくなくて何か他のことをはじめると見るべきでしょう。

**編集部** 行ってしまえば楽しいというのだそうですが……。

**丸木** つまりそのお子さんは自意識過剰なんです。そういう子は切れ味もいいかわりに一方ではわがままです。

やはりご両親が、過保護というか、関わり方が過度にすぎたために、集団に積極的に入っていく、自主性、主体性というものが、頭の発達に比して未熟なんだろう。それで集団に入るのがおっくうになる。自分のしたいことばかり出来ませんからね。

ところが、頭さえ発達していれば、自主性も主体性も育たなくともいいんだ、という考え方が現在多いんですね。これがさつきいわれた、情報の側のまちがいでもあるし、受けとり方も一面的であった、ということだと思います。

このお子さんは、きちんとした生活習慣や生活のリズムが形成されていないんですね。集団には必ずルールがあります。朝から寝るまでのきちんとした生活のリズムがついていない子どもには、そのルールがおっくうで、恐いほど集団に入れなくなるんですよ。どんなに頭の中がゆたかでありましてもね。ですからどうやって園へ行かせるか、というより、これを機会にそういうお子さんの内面の問題について、お考えになってみたいかがかと思えますね。そして親の側が、どんな人間をよしとする価値観を持っているのか、子どもをどんなふうに育てたいのか、そのへんのとらえ方を、一べん考えてみるべきじゃないでしょうか。

そこで情報とのかかわり方ですが、今家庭教育が非常に問題になっていますけれども、その問題になり方が、いつも学校とのかかわりで考えられているんですね。日本の過去一世紀の歴史の中で、学校がこれほど重要視されたことは一回もなかったと思います。

私の子どものときなんか、親は天気の良い日なんか学校に行くもんじゃなないと思っておりまして。(笑)農業ですから

ね。先生が家庭訪問にきて、いたずらで困るなんていいますと、私の母親は「イヤ、この子はとてもよく働くし、役に立っていい子だ」なんて、堂々といっておりました。

一般に今のような学歴社会への期待がなく、百姓の知恵として、自分たちの生産労働を中心に、子どもをどんな人間に育てたいか……それはよく働いて、人にきらわれないようにというような、一つのイメージがあったのです。

それが一九六〇年以後の高度成長期に、子どもへの教育投資がさかんになり、学校はあらゆる幸福が出てくる打出の小槌みたいに考えられるようになったのです。学校がその期待にそわないと、自分で塾へやっつて受験競争に勝ち抜かせようということになる。勉強のできる子にするために、家庭教育いかにあるべきかと(笑)そういうことになってきて、夫婦の間にも、どうしたら子どもを点数競争に勝たせられるかという話題が中心になった。

私は、そうなった意味合いはわかるけれども、しかしほんとうは、家庭教育を考える場合、もっと別のことが論じられ

なければならぬのではないかと、まあそう思っているわけです。

マスコミもまた、学歴を手に入れさせる以外に、子を持つ親の喜びはないみたいな学歴社会の幻想を再生する力を持ってきた。歪んだ情報ですね。

家庭教育いかにあるべきかというときに、むしろ私なんかは、現在家庭と名が付くような家庭がどれほどあるでしょうか、と思うことが多いです。

だいたい、家庭というのは、非常に素朴に言えば、夫婦がいて子どもがいて家族があつて、皆心が通じあつていて、親子水いらず、血は水よりも濃いなどというところ、そういうものの中で話し方から約束の仕方から、ファッションの好みから、恋愛の仕方にいたるまで、いろんなことについて子どもに対して一定の方向づけがなされる。しかも窮屈なところではなくて、時には笑い、時には泣き、時にはとても皆の心が結びつき、家族の誰かに不幸なことがあれば、皆自分のことのように悩み、悲しむ。そういう場だろうと思います。心の結びつく家族の関係が基本になつて、家庭というものがあらずなんだが、高度成長の中で、公害

が日本を破壊したように、まず破壊されたのが家庭なんですね。

ほんとうに子どものことを知らないお父さんが多いです。うちの子はこのごろどうしてますか、なんていうし。(笑)

お母さんはいつもいららして、旦那さんを監督する、と。(笑)

親父さんは間借り人で子どもは下宿人で、心の結び目というのがないままに、お互い半独立国みたいに部屋をもつて暮している。だから子どもが自殺したとか、自殺未遂をしたなんて場合、あの子がまさか……私には分りませんでした、という。非行を犯した時もあの子に限つて、という。

それほどに、外なる情報には明るいお母さんが、内なる情報にはもつとも暗いという現実があるんですよ。

私の両親など、無学でしたが素朴な意味での、ほんとの家庭は作れたんですよ。もちろんそれは封建的な、子どもを私物化して親のいうなりにするというような、歪んだ一面はありましたが、しかしどれぐらい親が自分のことを考え、自分が親に対して反抗しつつも何をしなければならぬか、ということが体で分るような

関係があつたと思うんです。

ところが戦後の新しい憲法と民法のもつとで形成された日本の家庭というのは、夫婦を単位とする一世代二世代の単一家族で、家庭そのものは非常に合理化され、近代化の方向にむかつたと思います。そういう核家族化の方向を、私は一がいに否定しようとは思いませんけれども、何か、その中で家庭に思想的に形を与えていったものは、やはりアメリカの社会であり、アメリカの合理主義、アメリカのモダニズムであつたと思いますね。

行きつくところは、ニューファミリーとか、あるいはフリー・セックス、愛とセックスが別物であつたり、セックスが単に快楽のみであつたり、家族の中で皆一人一人がわがままをいうのを許容するのが民主主義であつたり、子どもの創造性を伸ばすことであつたり、ね。

親が寛容であることが何か非常にいいことであるようにいわれて来ましたがね。日本の親すべてが子どもにきついことをいって、お母さんホントに反動的ね、といわれること、ガンコ親父といわれることを、いつも戦々競々とおびえているような状態だね。

これは、私はほんとうはまちがいだと思っただけです。最近の自殺は、十代と六十代が圧倒的で、二双曲線をなしていますね。十代の自殺は家庭の破壊と、受験競争に傷つく子どもたちの病理を反映しております。六十前後のは核家族で、子どもが独立していったときから老後の不安が始まり、しかも福祉政策はたいへんおくらせている、ということの反映だと思います。

家庭教育はいかにあるべきかじゃなくて、家庭いかにあるべきか、が問われること、今ほど重要なときはないんじゃないかと、私は思う。



子どもがものを買ってくれといったときに、家の家計ではそういうことはやれませんが、と厳然といえる親がどれだけいますか。

電話なんかでも、家の子はテレビを見ていて、夕飯になっても離れようとしませんが、どうしましょう、なんていうお母さんがいますが、消しやあいいいじゃないかというんですよ。(笑) テレビ一つ消せないように、どうして子どもが育てられますか。子ども育てるなんて、命がけの仕事ですよ、テレビ一つ消せなくて、それができるなんて私は思いませ

ん。もろもろ考えると、今の家庭は物質的に充足されるのが、豊かさであり、幸せだという認識が強いんだと思う。そういうお母さん方が子どもに教育投資をして、子どもが高校、大学を出て、はい、さようならと行って独立していった時に、にわかに老後の不安が始まる。六十代の自殺は、女性の自殺が最近急上昇しておりますね。これは若いときは夫にかしげき、子どもができれば子どもにかしげき、自分のライフ・ワークを持たないままで生きてきた、日本の女性の末路ですよ。

今は情報ということからいえば、二、

三十年前とは非常に違ってきております。現代社会というのは、一面からみれば独占資本主義の社会だけれども、一面からみるとすべてが情報という世の中です。その情報が新聞、ラジオ、テレビばかりでなく、着るもの、食べるもの、すべてが情報なんです。二、三十年前の人間なら、情報が少ないから、自分の経験が考えるもどになつたわけですから、

が今のような情報過多の社会ですと、いったいこの情報をどう自分の中で内面化し、どう自分の考え方に組み込んで、それを資料としながら自分の考えを独自性として出していくか、ということが非常にむずかしい時代だと思っただけです。

小学校の四、五年生が、平均二時間半もテレビを見るといふので、子どももその考え方は、完全にテレビやマンガ週刊紙によって作られているんです。いわば家庭そのものが情報によって破壊されている中で、よその家庭はどうであろうとも、わが家はこれでいくんだ、というテーゼが持てる、そしてそれを子どもに要求できる、ということが一ばんすばらしいんじゃないでしょうか。

たとえば生活習慣にしましても、もう

四、五才までに、うそをつかないとか、

自分のものは自分で管理するとか、働くことをいやがらないとか、そして自分が充たされたように、人もそう思っているんだから、人のためにならなければいけないとか、そういう夫婦の持っている好ましい人間とはかくあるべきだ、ということがね、やはり四、五才までのうちに徹底的に身につけられるようでないこと：羽仁説子さんがどういおうと、松田道雄さんがどういおうと、わが家はこうだ！というのを持つべきですよ。羽仁さんの子でも、松田さんの子でもないじゃないですか。うちの子なんだから。(笑)

抽象的なインフォメーションでは子どもは育たないんです。親が自分でいったとりのことを、自らして見せるという、生き方そのもの、それによって子どもの内面というのは作られていくんですからね。

そうですね。そういう時代に生きているんですから、私たちの方をそれをセレクトしていくモノサシが、教養としてできていなくてはならない。

それは非常にむずかしいことは私には分るんです。しかしそれをしませんとね。お母さん方いろんな勉強をなさいますけれども、講演を聞くだけで、自分の答案はお書きにならない。(笑)自分の答案を書かなくちゃいけません。十人それぞれ自分の答案を書いて、皆でつき合わせよって、はじめて自分のモノサシができるんです。サークルとか、勉強会でそういうことをなさることですよ。

それから、働いているお母さん、忙しく社会活動しているお母さんというのは、よく子どもとの情が薄くならないかなどと反省されますけれども、むしろそういう親の子の方がすぐれていますね。強じんに育てられている。そういうお母さんは視野も広いし、自分の生きてることについて自信と生きがいを持って、ハッキリお母さんはこう思うよ、と子どもに言えるということね。封建的とか、反動的とか、そんな抽象的な言葉にたじろがな

いのがたいせつです。

お母さん方の体験と実践の交流、討論それをせひやって、モノサシを作る努力をなさることですね。

**編集部** 戦前の封建的親子関係否定の教育論が実践してうまくいかなかったというのは、そのへんの問題でしょうか。

**丸木** 日本人の文化的体質というのは、こういう島国で、こじんまりと純血を保ってきたところから、特色があるんですね。それは新しもの好きで、外からの情報に対してすぐ身ぐるみ脱いで入っていく。(笑)

戦後の新憲法体制というのは、それは立派なことですけども、それに移行していくためには、日本がそれまで持ち続けてきた二千年という文化、社会的伝統それを踏み固めながら批判的態度を持つて入っていくという、プロセスが必要でしょう。ところがいわれるとすぐ明日からそうなる。(笑)

これほど、社会の様態が一変できる国とこの世界にないんじゃないでしょうか。このかわり身の早さが、間違いのものもあり、現在世界の信用を失う原因ではないでしょうかね。(和光学園校長)

(まとも・和田)

# 手のかからない鉢植

## 鉢花を長もちさせるには

冬は鉢花の季節です。外は吹雪なのに、ガラス戸の中はシクラメンが咲き匂う。しかし一鉢二千円もしたのですから、なるべく長もちさせたい……これが今回のテーマです。

### 一、まず日当り

何故冬に室内で花が咲くか。第一のポイントには冬には部屋の奥まで陽がさしてくることで、ところが二月ごろから陽ざしが高くなり、うっかりすると部屋の中では、特にパンジーは花が咲くどころか「もやし」になってしまいまふ。出来るだけガラス戸のすぐ脇か、思い切った口中は外に出しましょう。

### 二、相変らず水やり

買った当初はキチンと水をやっている、暖かくなるとつい忘れるものです。なお素人の水やりの話を聞くと、一回にやる水の量が少すぎる場合が多いようです。回数は週二〜三回に減らしても、一回に中位の鉢でも水をコップに二杯ほどやる、これがコツです。

### 三、細かい手入れ

パンジーやプリムラは花が終ると種子をつけますから、出来るだけ咲いた後の花がらを取りましょう。シクラメンは、時々花がらから病気が出て、株全体をダメにすることがあるので、



気をつけましょう。肥料は固型肥料を月一回程度やりましょう。一回にやる適量は、肥料の箱等に書いてある筈です。

### 四、外に植えかえる

鉢花を冬から春に長もちさせる最大のこつは

### 五、来年も咲かせる

外に植えかえることです。スーパーの園芸品売り場等で売っているプランターといわれるプラスチックの箱でも、魚屋さんで魚を入れるのに使うポリトロという発泡スチロールの箱でも、木箱でも、ポリバケツでも何でもかまいません。プランター以外のものなら、底に少し穴をあけて土を入れ、鉢花を植えこむのです。植えたらベランダなり、家の南側なりに置いてやりましょう。パンジーやプリムラなら今すぐでも、シクラメンなら二月末の方が安全でしょう。室内の鉢より元気に咲きます。プランター等の利点は水やりの回数が少なくてすむことです。一回の量をふやせば、週一回でも大丈夫です。シクラメンは六月頃になったら鉢やプランターに植えたまま水をやらないでカラカラに乾かしてしまします。そうして九月になったら掘り上げて新しい鉢に新しい土と肥料を入れて、球根を植えて十分に水をやるのです。少し花が咲くのは遅れますが再び花を咲かしてくれそうです。

プリムラ・ポリアンサ（黄色や青い花の咲く派手なプリムラ）は、花が終ったら地面に植えておきましょう。来春また咲いてくれます。

# 生活の匂いとロマンを！

——わいふに望むもの——

甲府市

風間ゆり

「人間のもっとも大きな勝利のひとつは、盲目的な母性本能にたいする勝利——つまり、とくべつの訓練をうけ、選抜された人たちに子どもを集団養育させてこそ、始めて私たちの社会にふさわしい人間をつくりあげるこゝとができるのだということ、理解したことだわ。昔のような、ほとんど気がいじみた母性愛というものはなくなつたし、全世界が自分の子どもを大切にし、かわいがつてくれるから、昔のような危険はないのだということが、どんな母親にもよくわかつているのよ。だから自分の子の運命にたいする動物的な恐怖からおこる、オオカミの母親みたいな本能的な愛情も、消えてしまつたんだわ」

「それは、私にも解りますわ。だけど頭の中ではわかつたつもりでも……どういうわけか、時々むしようにほしくなるんです。私の傍によちよち歩くあの人によく似た小さな子どもが……」

「母親の島があるわ。あそこには、自分の手で育てたと思う母親たちが住んでいるわ。たとえば愛人を失つた人たちとか……」

この会話は「アンドロメダ星雲への旅」という、SF

小説の一部分である。(エフレイモフ著、川上汎訳、理論社発行) 長々と引用したのは、この二人の女性の話していることが、我々が今考え、論じていることの行きつく先の姿のように思えたからである。最後の言葉で解るように、彼ら子どもをほしがっている女性は前に宇宙旅行をしており、これからもう一度宇宙へ旅立つ決心をしている。この会話の前に、「自分の血をかけた子を人の手で育てるために離すなんていやだ……」と言う意味のことを年長の女性に話して、こういう会話となつていたのである。

この若い女性は、長い宇宙旅行で二度と地球へ帰れないことを承知の上で、愛する男性と共に宇宙船に乗り、自分たちの子どもに、宇宙旅行をつづけさせて(人類の未来の幸福を信じて)宇宙開発(今流の言葉でいうなら)のため他の何人かの男女と共に旅立つ……。彼らは計算上一四〇年地球年を宇宙船の中で過す。当然生きてはいられない。遺体は棺用ロケットにおさめられ宇宙空間にとびさるだろう。遠い祖先の時代に、戦死した勇士のかばねをのせた小船が、波のまにまに大海をただよつたよに……。それでもなお、彼らとはどび立つ……。何故？





それは彼らが、昔おそるべき拷問、牢獄が待ちうけていることを承知の上で、敢て人間の自由と尊厳のためたまたかた無名の戦士たち（これが現代の我々のことなんでしょう）のこと、そしてその人々の志の上に今の文化が築かれてきたことを忘れていないからであり、その上で次代の人々の幸せを願って同じような英雄的な壮舉が行われるのだ……と、この小説は語っている。

この小説の年代は、今から二千年経た時代と設定されている。私はロマンチストのほうだから、これを読んだ時、胸が「キュッ」としめつけられる様な気がした。私たちもやっぱり何かをしなくてはいけない、と思った。

この小説では、むずかしい宇宙空間の科学的なものが沢山あつて解りづらいこともあるが、その頃の人間生活と人間の考え方がでてくる所は興味をそそられる。例えば「この時代には家事使用人というものは全然存在しないので、各人はいつも身のまわりをととのえ、規律正しい生活を送らねばならない」とか「百世代にわたる祖先たちの健康な清潔な生活は、地球上の数多い生命のなかでもっとも美しい創造物——女性の肉体の、しなやかなしかも力強い線を芸術的完成の極致にまでみがきあげたのだ」などということばがでてくる。

長々と他人の作品の紹介になつてしまつたが、私の言いたいことは今の女性が置かれていた状況は、少なくとも五千年前あたりからの歴史的産物で、今さかんにそれを是正しようと、わいふの皆さんも苦闘しているのだと

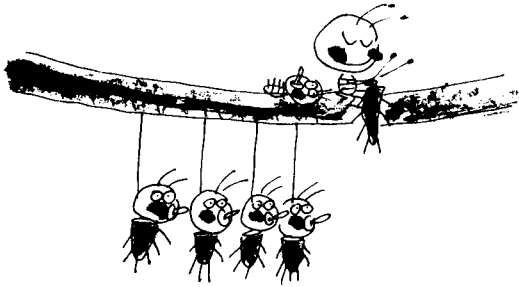
思う。この重い年月の圧力をやぶるのは私たちが勝手に我が道を往くで、やりたいようにやつていては、うまくいかないのではないか。二千年も経たなければ、女は完全に解放されないのか、バックラしい……と言わず、この壮大なロマンを、もっと早く実現するための毎日……を考えたいと言ふことなのである。

わいふに投稿したり、本をよんで討論したり出来る人たちは、まだまだ全女性の中では一握りの存在でしかないことを考えてほしいのだ。もっと多くの人たちとも手をたざさえ、今の生活をどうよくするか、の知恵を出し合ういい意味の現実主義者としても生きなければならぬ。その上で自分の心の中の夢（出来るだけ巨視的な）を育てたい。

わいふを「食うに困らない、考える知的水準もある人たちの、言論的あそびの場」にしてしまいたくないのである。これが私のいう生活の匂いとロマンを求める気持、皆さんから叱られる覚悟で書いてみた。最後につけ加えさせてもらいたい。

- ①世の中は必ず変わる。生んだ者に育てる責任をおしつける習慣？はいつか消える。
- ②子どもを育てるといふ仕事は、非常に創造的で魅力のある仕事、芸術的できさである。（他人の子を育てる場合は尚更）
- ③人間は必ず女が男である。女として生れた以上もっと大らかに女であることを誇り、生み、わめかず実践で制度、風習をも変えること（①と関連あり）

# ママ、さわってごらん



土浦市

奥井登美子

モコは、今レッキとした小学五年生。けれどやせっぽちのせいとか、それとも、いつもハツカネズミのようにくると、よく動く動作が何となく幼いせいか、三年生か四年生に間違えられることが多い。

彼女の一番得意なのは算数でも国語でもピアノでもない、木登りなのだ。

家中、どこを探しても彼女の姿が見付からない時、私は庭に出て、木を見上げる。

庭に一本、ひときわ大きなイチヨウの木がある。お隣の三階の屋根よりは、かなり高いから、おそらく四階建ての建物の屋上へ登るくらいの高さはあるのだろう。そのテッペンに近い木のまたに、ちよこんと赤いセーターが見え、ジーンズのズボンがしがみついている。

給食のない土曜の昼食は、大抵この木のテッペンだ。空を見上げながらのサンドイッチは、地上で食べるのと違った特別の味なのだろう。

裏庭に一本、ヒシヤゲタ柿の木がある。彼女はまるで猿のような早さで、この木にも登る。

イチヨウの木とちがつて、この木には時々毛虫が大量発生したりする。イモムシの親指ほどの太さの大きいのが、ゆうゆうと昼寝している時もある。けれど彼女はひるまない。

毛虫も、そしてイモムシも彼女の仲の良い友達なのだ。

庭に何本かのサンシヨの木がある。

その木についたアゲハの幼虫を、彼女は大切に育てる。風が強い日、彼女はイモムシたちが風にとばされはしないかと気をもんでいる。雨が強い日、とうとうたまらなくなつて、自分の黄色いカサを、木にくくりつたりする。こうして過保護に育てられたイモムシたちは、自然淘汰されるチャンスがないままに、大量に生き残るから、毎年、夏の終り頃には、実に深刻な食糧危機におちいる。

葉の一枚もなくなつたサンシヨの木に、まるでそれがイモムシの木のようにイモムシばかりが三〜四十匹しがみついて、食べるべき食糧を探しまわるといふ危機的状況を見るのは、あまり気持ちのいいものではない。

「人間だって、イモムシだって、過保護はよくないのよ」

口がすっぱくなる程、注意したにもかかわらず、今年も、たちまち、代りに植えたサンシヨがイモムシの木になつてしまった。

さあ大変!!

「ね、ママ、お願い。何とか助けてやって、あと二〜三日たてば、サナギになるんだから……」

モコは、もう泣き出しそうな声を出して



る。

ふと、私はいいことを思いついた。イモムシを二―三日里子に出すのだ。

モコは早速、ご近所の庭にサンショのありそうなお宅にすつとんでいった。

私はそおつと、あとをつける。

「あの、お宅の庭にサンショの木、あるでしょうか?」

「ありますよ」

「すみませんが、うちのイモムシを里子に出したいのですが、二―三日あずかつてもらえますか?」

「えっ!! イモムシ!! きゃあ」

家へ帰つて、彼女は撫然として こういった。

「大人つて変ね、イモムシと聞いただけで、おつかないとか、きたないとかつていうんだよ」

彼女に、イモムシのようなもの、決してきかないものでも、こわいものでもないし教えたのは当の私である。しかし、いま私は、いささか効きすぎた薬にとまどつてしまつてゐる。薬は効きすぎてもよくないのだ。

モコがまだ四―五才の頃、

「ママ、ゴミ虫は、いい虫? 悪い虫?」

絵本を見ながら、

「ママ、この人、いい人? 悪い人? ドロボウ?」(子供はドロボウが大変好きなのだ) 何でも、いいと悪いと二つに分けてみる作業をはじめた時、私は、なぜかおそろしいものを見てしまった気がしたものである。

戦争が正しいときめたら最後、それに反対する人はすべて悪。そんな時代の片鱗を見て育ち、正しいとされてきた教科書に墨を塗つた経験をもつ私たちにとつて、何が善で、何が悪か、そこがはつきりしないくせに、簡単に善玉と悪玉を分類整理してしまう思想は、何やらおどろおどろしたおそろしさの芽を見るおもしろいとする。

その上、異様な、みなれない形のものを、すべて悪ときめ込むのも納得出来ない。

子育てにあたつて、私はせめて我子だけは形がみにくいものを、こわいとか、きたないとかと思わない子に育てたいと決心した。

へびとか、毛虫とイモ虫、みみずなど、人間の目から見ると少々形のちがつたものを、きかないとか、こわいとか感じるのには、人間の間であることへのおごり以外の何ものでもない。形のみにくいものが何できたないものなのだろうか、形のみにくいものが何で悪なのだろうか……。

こういう感覚的アレギーをたち切るのには、なるべく幼い頃の方がよいと考えた私は

早速、ヤモリを一匹つかまえて来た。ヤモリはよくみればなかなかユーモラスな面白い形をしている。

「可愛いよ。頭をなでて、いい子いい子してごらん」

娘はキャツキャツとよろこんでヤモリをこわいとは思感なくなつたようだ。

次にみみず。次にオケラ。次に毛虫。次にガマガエル。

次々に実験動物をつかまえては、大きな実験動物に試みたのであるが、正直いつて、なぜかイモムシだけは気がすまなかつた。

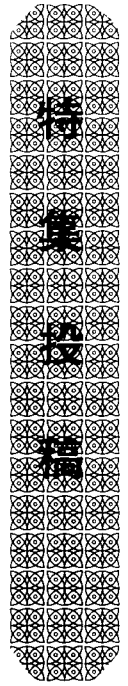
悪いものでないことはよくわかる。しかしツメが生え、さわると身をくねらせて、何やらキトキトと音をたてるやつだけは、どうも苦手なのだ。

彼女はしかし、私の子育ての思わくを二つも三つもとび越えてしまつたらしい。

「ママ、さわつてごらん!! 可愛いよ。このイモムシ背中のところか少しざらざらしてゐる……」

うへえ!! 少々げんなりしながらも、さわるしかない。

ああ、今年もまた、イモムシに悩まされるだろう。



## 閉じこめられた母親たち



坂戸市  
高橋裕見子(27)

「子育て」のいろいろな問題といった時、いつでもその一部分だけがクローズアップされ、それは、たとえば「子どもの健康」であったり、「子どものしつけ」であったり、「子どもの遊び」であったり……。本当に問題にされなければならぬ部分はどこにもあらわれてこないのを感じてしまう。子どもの健康もしつけも遊びもすべてひっくり返してその人の肩にかかっているというのに。そう母親のことである。子どものあれこれを取り沙汰する前に、子どもを育てている母親自身のことを少し考えてみたい。

私が独身だった頃、若いお母さん達が小さな子どもを近くの公園で遊ばせながら一時間も二時間もおしゃべりしている姿をよく見かけた。「おしゃべりするよりほかにやるべきがないのかしら」少し軽蔑しながら私はつぶやいたものだ。まだある。近所から聞こえてくる、母親のヒステリックに子どもを叱る声。母親の苛立ちがそのまま伝わってくるような大きな声。「あんな母親にはなりたくないな」というのがその頃の私の気持だった。

た。

今、私は団地の五階に住み、二歳二カ月の息子がいる。私は近くの公園で子どもを遊ばせ、一時間も二時間もおしゃべりをし、時々団地の一階にまで聞こえるような大きな声で子どもを叱りつける。悲しいことにあんなふうになりたくないと思っていた若いお母さん達と全く同じ母親になっているのだ。残念ながら私は自分が母親になるまで母親が置かれている状況について考えようとしなかった。だから目が離せない小さな子どもを公園で遊ばせている母親を見て暇な人達だと言えたのだ。そんなに大きな声で叱りつけなくてもよいのに、つい大きな声が出るのは子どもの悪い行為に対してだけではないような気がする。私自身がよい状態にいないからではないだろうか。母親が生きて生きていないからではないだろうか。行き場のない感情を自分より小さく弱いものに向けているのではないだろうか。

母親になって、母親というものがいかに狭い範囲の中で生活しなければならぬのか思い知らされた。働きたくとも働けない。(小さな子どもがいると、せいぜいパートかアルバイト。たとえきちんと働けた場合でも二重、三重保育を考えなくてはならない。二重、三重保育が子どもに与える影響を考えると働くことに足踏みしてしまう)何か 勉強したい、話が聞きたい(たとえ子どもに関する話であっても)と思っても、子ども連れで聴講はできない。図書館でさえ必要な本を借りたらさっさと出てこなくてはならない。趣味の習いごと、観たい演劇、映画、聞きたい音楽……等、子ども連れではとても行けない。子ども連れで堂々と行けるのはデパートぐらいである。

ただひたすら家の中と家のまわりで生活し、子どもを遊ばせ、健康に気をつかい……ということになる。こんなことを書いている私の耳に「そんなことは母親だから当然ですよ。子どものことを考えたら、どこかへ出かけたらい、何かをしたいと考えることこそ間違っているのですよ」という声がある。そうだろう。私の中にもかすかに迷いがある。だけど、どこかへ出かけることが、何かをすることが、子どもにとつてあまり幸福なことではないとはつきりと言えるだろうか。考えてほしい。社会と切り離された家庭と、家庭のまわりだけで生活し、やりたいことがやれず、見たいものが見られない、母親がこういう状況にあつて本当に子どもを育てられるだろうか。母親の状況、そして母親が生きている社会の状況を忘れてしまつては「子育て」は考えられないと思う。

## 甘すぎる「子育て」の蜜

東京都

北川 洋子



角の荒物屋の小父さんにはいつもしてやられる。すっかり枯れたと思つて捨てた私の姫りんごやさつきを拾つて次の季節には見事に咲かせて口惜しがらせる。「これがあのりんご、本当なの。どうしてこんなにうまく咲かせるのかよく教えてよ」せがんでよく教わつたつもりが又失敗。

「植木つてむずかしいわねえ」「むずかしくないよ。花は独りで咲くのよ。花の厭がる事しないで咲くの邪魔しなきゃいいんだよ」こういわれると、「そりゃそうだけども」とか口の中でモゾモゾまかして退散するよりない。余りにも思い当る事が多すぎるのだ。

姫りんごならまだしも私の二人の子ども達に関しても私のした事は皆要らぬお節介ばかりだったみたいなのだ。子供の成長の美しさ見事さは私の目を眩ませるのに充分だった。私はまるで自分が子供を育てているような錯覚に陥り何か一大事業を成し遂げている様な気負いを感じたものだった。子供の中に神が配剤された成長の力を看破するには「子育て」という言葉にこめられた自尊心をくすぐる蜜は甘すぎるのだ。そして私のした事は子供の成長する芽を自分勝手な方向にねじ曲げようとする努力だけみたいだったのだ。ある日は水をやりすぎてある日は枝をつめすぎて——それでも子育てごっこはとても楽しくて私は子供の中にのめり込み自分をとり囲むあの「不安」さえ忘れ得るのだ。「子育て」には、「人間生きるも死ぬもたつた一人」という冷酷な原則を忘れさせる麻薬の陶酔迄用意されているのだ。

幸い我が家の子供達は姫りんご程高級品ではなかったので巧く私の妨害をくぐりぬけ枯れもしなかった。その薄く生えてきたひげを見ると「君よくやったなあ」の感慨と彼等には言えない後めたさを覚えるのだ。「子育て」という言葉は平凡な子供を授かった場合でなく、神に高く買われて育ちにくい高級な花を預けられた様な親の場合にしか一寸気恥かしくて使えないのではないだろうか。

我が家の子供たちも後数年で成年に達する。「子育て」の麻薬の覚める時期が迫っている。何もしなくても彼等と一緒に寝起きしているだけで「私はなくてはならぬ人間」と思いこめる特権の期限切れも近くなってきた。私にとつて「子育て」の苦しみはこれから始まる。子供達に寄りかかつてきてすつかり萎えてしまった足で歩いていけるだろうか。彼等も近頃思いやりのテクニクを覚えて 私の甘えや妨害をスッポリ受けとめる振りなどしてくれる。欺されない様に上手に麻薬から覚めなければ——。彼等が私の所にやつて来る以前のあの馴染みの深い冷たい風こそが私の伴侶なのだから。

## 「失敗だらけの子育て」でも



川崎市

渡部しのぶ

むつかしいけれど、やりがいがあったて……でも、時どき、放り出したくなったり、また時には人生の最大の「生きがい」でもあつたりして……育ててきた一人息子も、今は十九才になりました。

どうやら子育ても終つてほつとしてはいるものの、もつと、おちつかで、もつと、素直に、もつと、もつと……ということばが、泉のように湧いてきます。

ひとりっ子故に「自立心のある子に」という意識が強すぎ、

甘えを許さぬ突張りの育児が多過ぎたように、反省しています。もしかしたら「ひとりっ子はだめ」といわれないように、私の意地がそうさせたのかもしれない。

オロオロ、ハラハラしたりの毎日でしたが、この「ダメ母さん」の子育て失敗論も、今は、楽しい思い出として笑つて話し合えるようになったのも、彼が私を乗り越えて育ってくれたからでしょう。そんな彼も、今、青春の入口でとまどつていらっしゃるのです。やがて私を「女」として見るようになったとき、大人同志として、どのような人生の道づれになつてくれるのやら……。

今になつてしみじみ思うのです。

「失敗だらけの子育てだったけれど、やっぱり母親になつてよかつた」と。

## 試行錯誤の連続



東京都

富沢あき子(48)

子育てほど楽しく、またむずかしく、そしてやり甲斐のあるものは、またとないと思います。でもその結果が良かったのか悪かったのかは、到底断定しきれないものではないでしょうか。私が二十二才で第一子を産んだ時には、若さと気負いから私達なりの育児の理想があつて、その通りのしつけ方をしました

が、相手は生きた人間、思うようにいかないとわかるや、翌日からは掌を返してやり方を変えてみたり、迷いばかりが先について、試行錯誤の連続だったような気がします。

生まれた時から反抗期だったような娘は、間もなくミルクを呑まなくなり、口を真一文字にキッと結んで絶対開けてくれませんでしたし、三才頃、皿の上にひっくり返した水を、「今ちようど洗おうと思ったところだ」などと理屈をいって、大人達を啞然とさせ、八才の時には、ピアノのお稽古の先生が気に入らないからと、サツサと一人で断つてきてしまったり……。この三つの出来事は、今でも如何に気の強い子であったかという語り草になっています。一事が万事その調子でしたから、私達もホトホト手をやき、本気で怒り、涙したことも何度かあります。

第二の息子は、未熟児な上に病弱ということもありましたが、上の子の経験を生かした柔軟路線が利きすぎて、少々部屋を散らかしても、男の子だし、小さいことを気にしない子の方が大物になる素質があるなんて他人にいわれて、放っておきましたら、大物にならず、散らかし魔になりました。自主性を活かす、自覚を促すなんて、言葉は立派ですが、本人の自覚をまっぴら、とうとう大学浪人すること二年、現在は大学生ですが、自覚未だしの感じですよ。

それでも親の方も年のせいとか、すっかり寛容になってしまつて、「健康で性格の良いのが何よりよ」などと言いつつ始末。上の娘が申します。「お母さんも自分の息子の程度がやつとわかつて諦められたのね。それにしてもアマーイ」と。そうかもしれません。親も勝手なもので、正直いって、子供をダシにし

て楽しんだこともいっぱいありました。教育ママやPTAママといわれた時代も、それはそれで子育て即一つの生き甲斐であったと思います。だからといって育てるということに自信ももてたこともありません。ただ一つ、二人の子供を、家庭教師につけたり、塾へ行かせたりということだけは、とうとう一度もさせませんでした。そのことが、今、結果的にみてもよかつたような気がするという程度です。

一貫性のない育児。ものの本や人の話に、その都度右へ左へ揺れ動き、二人位の子供では、それぞれ違った人体実験をさせられたようなもので、子供自身さぞ迷惑だったかもしれません。親の責任は高校へ入るまでと思っています。これから先もどう成長していくのか、どの道、最後まで見届けられぬのが親の宿命、今は意識して子離れに努めています。

## 神経ばかり尖らして



富山市

永森 絹江

長女墨子が生まれたのは、昭和四十七年四月五日午後十一時五十分、待ちに待ったあのうぶ声を聞いた時は、それまではりつめていた気持が、全身からぬけていき大任を果した気持でした。それまで幼稚園に勤務していた私は、今度は我が子の育児に専念することになりました。初めての我が子となると、新米ママ私は、ミルクを飲まない、もどすといっっては大きすぎ、鼻汁

がでるといつては病院へ行き、生まれて四十日目に気管支炎になつて、十二日間入院。あの注射器ほどの細かい足に、容赦なくされた注射に、身をけずられる思いで過した数日。墨子ちゃん!!ごめんさいね。ママの不行届きで病気にさせてしまつて……と心でわびながらの入院生活でした。

それから病弱ながら一年を過ぎ、誕生日を迎えた時は、歯が何本かはえ、足も一歩二歩出たといつて、家族ともども大喜びをしておりました。

その頃です。子供に与えるヤクルト論争が始まったのは……。私は何かで、ヤクルトには、歯の質を侵す乳酸菌が入つていと聞いていたので子供に与えていなかつたのですが、祖母が、ヤクルトをやつていたので、ヤクルトは子供の歯によくはないからと説明し、与えたくない由を伝えたのですが、祖母は、小児科へ電話し、ヤクルトは腸の作用によいから与えてよいといわれた由、物には、一長一短があり、私自身、歯が弱いので、子供だけには、虫歯をつくりたくなく、頑強に反対しつづけ、嫁姑の争いまでいきましたが、そうまでしても始めての子供は大事に大切に育てたいという私自身というより、母親としての自覚からだつたと、今思い巡らしているのです。

そして四九年九月に長男が生まれ、希望の男の子でしたので、ほつと一安心した気持でした。

それから五十一年九月に次女が生まれ、今では三児の母親……。なんだか私自身で、現況を信じられない様な気持で、育児戦争をしております。

そして長女も五才になり、長男(三才)と二人で毎日、元気に保育所に通つております。

そして今では、昔(?)のヤクルト論争はどこへやら、ヤクルト二本を二人の子供が、仲良く分けながら飲んでおります。(長女と長男の分と思つて二本頼んだのですが、次女も欲しいといつてホ乳ピンをもつてくるので……。今度から三本頼むつもりです)

そして長女は、奥歯に虫歯二本あり、もちろん完治ですが、今では、五才としては、はやいと思ひますが、前歯がはえかわり永久歯がでてきたり、歯には、今でも神経をとがらしてあります。

## あふるる思いの

## ほんの一部だけど



横浜市 井上 桂子

十年近くも昔になるが、寺山修治と語るとかいう会合に出たことがあつた。その時、氏が熱っぽい口調で家族崩壊論のようなことを唱えているのを聞いてひどく共感を覚えた記憶がある。夫婦、親子、兄弟といった血縁関係を否定し、生まれ落ちた瞬間から、誰の子でも、何者の所属でもない、一個の人間としてのみ生きていく、一定の集団の中で平等に育てられるべく子供は産み出される。そこでは無論、一夫一妻も、したがつて特定の家庭もなく、セックスは単に風俗のひとつの姿でしかない。詳細は全く覚えませんが、その一見、デカダンにみえる自由な発想に驚嘆した記憶は生々しい。苦しい恋愛のさ中にあり、親兄



弟のうとましさに息苦しきを感じていた時期であった。今子供を持ち、子育ての真最中にあつて、家族とは何かという問いに、しきりに心が揺れる。

子供を保育園に預けて、職業婦人として活躍している友人は、子供を幼稚園にもやらないのでくせく子供に関わりあつて暮らしている私を横目でにらんで言う。

「大体、母親がひとりひとり、わが子だけの世話に明け暮れて、みすみすその才能や労力を埋もれさせているのは国力の無駄。子供だつて親兄弟という特定の関係から解放された人間集団の中で育つほうがはるかに自由に生きられるはず」

ふむふむと私は合つちをうちながら、彼女のよようにバツサリと潔く割り切れぬ自分に限りない自己嫌悪を覚えつつ、彼女がいなくなると、たちまち「イヤ、チガウ、チガウ、ソナナモンジャナイ」と反撃ののろしを高らかに揚げていたのである。いったい、無駄とは何だ、無駄とは。要するに、何を論じるにしろ、根底はその人の価値観なのだ。人、いかに生きるべきという、人間存在の意味をどうみるかという原初的な問いに全てはいきついでしまう。子供を預けて自らの才能を世に問うのもいいだろう。好きでないことを、やりたくないことを敢えてやつて、ただ耐えていること、犠牲になること、さらに、それに気づきすらしないことを非人間的と否定するのもいいだろう。どのように生きてても、大事なことはめざめるということだ。誰も子供を産めば母性にめざめるといふが、わが子を慈しむこと、面倒をみることに、いわゆる子育てそのものが母性ではない。子育てを通して、生命にめざめること、わが子を通して全ての子

供が見えていくこと、個から全体への飛翔がなされること、それが人生にめざめることであり、母性にめざめることだ、そんな気がする。そしてそれは、子を産み、自らの手で深く子に関わることから出発し、深く関わることによつて、より確かなものになりうる、そんな気がする。だとしたら、やはりサラリと潔くなんて、格好いい生きざまは私には無縁だ。といいつつも、どこやら胸の奥の底からムクムクとつきあげてくるものがある。矛盾だ。

## なまけ子育て実施中



大津市

中野 桂子

子供は、十七才（高二）と十才（小四）の女の子。私は独身時代から今もなお、地方公務員です。仕事を辞めようかと思つたのは独身の頃であつて結婚して子供が生まれて以降、べらぼうに自分がないような生活が続いたにかかわらず、子供のために退職しようとは思いませんでした。その理由の一つには、姑と同居であつたこと、（いろいろな意味があります）ふたつ目には、夫に万一のことがあれば、路頭に迷うものの数が増える危険性を抱きたくないこと。もうひとつは、仕事が楽しかつたことでした。

姑が子育てに関わるということには、その人にもよりますが

マイナス面も多くあります。自分と姑がトラブルをおこせば、マイナス面はますます大きくなるのでじつと我慢の子でおりました。十七年を経て、姑は今、養育院に入院しておりますが、廻らぬ舌でお、子供たちのことにサイハイを振っているつもり。こんな老人にはなりたくないものだ、よい教師をもつたものだと思っておりますが、不思議なことに、乳幼児期から身近の世話をしてもらった子供たちが、「おばあちゃん」のいないほうがすっきりした様子で、養育院への見舞いを好まないのです。「わてはこんなにしてやっているのに、母親にしかつかんと、昔から姑は愚痴っていました、何故そうなのか、子供にきいてみてもやすやすと答えは返ってききそうもない。人間関係とはそういうものなのでしょうか。」

さて、幼・小・中のPTAはおろか、入園・入学式もおつぼらかす母親でありました。父親が代行したり、両親なしであったり。(姑はそういう場へは一切出ませんでした)。

長女が小三の頃、「私に家にいた方がいいか?」とたずねましたら、「そんなこと考えたことない。はじめからいいないのだから」と申しました。そして今、十七才の彼女は、「家事專業の女性には魅力がない。職業第一だ」と言います。自分の能力や好みを生かせる大学へ進み、就職不可能な勉強はしないつもりで、進学校を選択中だということです。小四の方は「漫画家になる」のだそうです。どうなることやら……。しかし、子供たちに親の意向を押しつけることはしたくない。疑問がおくれば一緒に考えて解決しよう、そして判断は子供自身に。なまぐらな母親であります。

長女が生まれた時に、「これから先、何年ぐらい子供に縛ら

れるのか」と先輩に問うと、「まず三年は」という答に、「そのくらいは仕方あるまい」と思ったら、「まあ二十年はダメさ」という答を返す人があつて、驚嘆するとともに「そんなことはあるまい」と思つたのですが、それが本當の答だったと今思ひます。二十年、すなわち成人の日まで。

だから、子育て一辺倒にならないで、その時期時期に関わり方を変えて、親子とも無理なくともに成長していくのがいいのではないか——と私は思い、「なまけ子育て」実施中です。

ところが最近、いろいろな方面で社会活動している先輩が、「私みたいにするのが沢山あつても、子供がみんなおとなになつてしまつて家にいないと(手持ちぶさた)や(淋しさ)を感じる」とおっしゃるのを聞いて、それは(馴れ)で解決できるのか、(構え)で解決できるのか、(それが親子というものよ)なのか、わからなくなつています。いろいろな方の体験や意見をきいて、自分にあつた答をみつきたいと思ひます。

## 自分自身の生き方を



東京都

安岡 厚子

例えば、聖書に基づいた生活をしているクリスチャンの方達は、何も迷うことはないだろう。神の教えを忠実に守ろうとし、それに反しない子育てということなのだから、とても強いバックボーンと言えるのではないだろうか。

この例からしても、子育てを考える時、子供に接する両親の人間性、物の考え方が、重要なポイントになると思う。子供をどう育てようと思うのは、親の夢と言うか、当然の気持だけれども、その前に、親自身が人生をどう生きようかという姿勢、そして、毎日いかに生きているかということの方が、先ではないだろうか。自分自身の生き方が明確でないから、子供に対する態度もあいまいで、迷ってしまうのではないでしょう。

こう書く私も、四才と二才の子供を持つ専業主婦です。毎日、精神的肉体的疲労の連続です。子育ての渦中であって、いろいろ思い迷うことの多い毎日ですが、その中から、自分の生き方、自分の世界を持つよう微々たるものだけど、やっているつもりです。そして、やりたいと願っておりません。それが、引いては、子供に良い影響を与えることになるかと信じて……。

## 子育てを一段落して

京都市

新栄奈良江(60)



私は自分自身「教育程、後に及ぼす影響の多大なことではない」と、あの戦争でつくづく味わされました。大正の終りから昭和十二年位迄、学校教育を受けてきたので、戦争末期になってもまだ「神風」が吹いて、日本は絶対に負けはしないと、信じていた一人でした。子供達には「なぜ戦争に反対しなかったか?」とよく言われますが、そんな風に教え込まれたという教育のおそろしさ。その反面、良き教育を受けていたら……と思いまし

た。

先ず自分自身が勉強しなくてはと。幸いに丁度「民主主義教育」を押しすすめている時でした。暇を見付けては、新聞を、本を巡回図書を利用して読んだり、種々な会合に子連れで出来る限り出席したり、いろいろな人の(井戸端会議も)話も勉強の種にししました。勿論陰での夫の協力の大であつた事は、言うに及びません。子供は次の時代を荷う人、次の時代は、私達の時代より本当の意味の良き時代になるように、少しでも力のかせる人になるようにと思いました。「皆は一人のために、一人は皆のために」を基本に、考える力と判断力を持ち、心の豊かな、どんな逆境に落ちても自分で立ち上れる、を私の筋目にしました。以上のことを前提に、人前で正々堂々と、自分の意見を発言できれば、と思いました。

小さな商売で、その日その日の収入が違ふ我が家計に、四人の子育ては経済的に大変苦しい時期が過ぎましたが、良い時は良い様に、苦しい時にも良い面だけを見せるといふ事はせず、子供にもかくさず「今日はこれこれ」と打明けて納得させてきました。それと同時に、親も失敗することがあつても、かくしたりはしません。

私は、家事が大変下手なのですが、「お母ちゃんのように下手だったら大分損するよ」と。「経験だけはあなた達より大分上よ」と威張ることもありました。

高校生になった姉と、なりつつある妹弟、この時期が一番むつかしかったように思います。長男長女は休みに入れば、アルバイトを自分で探して行き、自分の必要品は買っていました。次女は定時制の高校で、昼アルバイト、夜学校をつづけました。

が、毎夜一キロ程ある電停まで迎えに行きました。次男は、毎朝新聞配達をして高校に通学しましたが、真冬の冷たい朝等は、可愛想な様でした。さあ四人がそれぞれ就職し、年頃になってきました。「自分の相手は自分で選びなさい。それには相手を見定める目を養わなくては駄目。」と、口ぐせのようにいつてきました。結婚費用も、相手方と共に自分達でして、長男を除く三人は、巢立っていきました。長男も私達と別に暮しておりません。その代り四人が四人とも、凡そエリートコースよりは、はるか遠方で社会の一員として頑張っておりません。私自身年を経ると、ふっと「もつとおいどをたたいて、せめてエリートコースの端っこでも居られるようにすべきたかなあ」など、思うこともありませんが、それぞれの人間性を見ていると、「いややこれで良かったのだ」とつくづく思い後悔は致しません。子供も私に恨みがないことは申しませんから。

独立してからは勿論、各々が自主的に判断して生活しておりますので、私達夫婦も、自主的に生活することにしていきます。四人共親に対する義務感だけはちゃんと持っているようです。

## 肩の荷を下ろした



東京都

渡辺美代子

長女は昭和二十二年生れ、長男は同じく二十四年生れ、戦後まもない未曾有の窮乏時代でした。

東京を逃れ浜松の伯父のもとへ、再び東京へ舞い戻り、文字通り無一物、ゼロからの出発でした。

それでも若かった私は、折紙や昔話をかいて糸で綴じた絵本、切り抜いた着せ替え人形等作りひもじさも忘れ子供と一緒にやり結構楽しく遊んだものでした。幼児二人を留守番にして共働きの出たことも有り、その後長女にあの時は毎日淋しかったと聞かされた時は思わず熱い涙があふれましたが当時は可愛想なと思つてもみませんでした。漸く中学生となり二人はアルバイトに行き学用品代や小遣い等自分の手で得ました。

我が家のモットーは、働かざるもの食うべからず、危険なタイトロップでした。

二人の青春は私も共に泣いたり笑ったり第二の青春を分かち合つた心算です。

子供には余り叱言は言わず、親の働きが悪くて叱言など言えた義理ではないし、悪く言えばほっぽり放し、良く言えば子供の自主性を尊重したという事で、長女も高校卒業後勤めのかたわら月謝を自分で払い色々習い事をやり、長男も大学に入つてからもアルバイトを続け、運転免許を取り、毎年スキーに行き夏は水泳と、友人にも恵まれアルバイトのし過ぎで盲腸炎になつたりしましたが、卒業後直ぐ結婚して子も得、新家庭の建設に努力しています。

子育てというより子を生きがいにして親と子が助け合いやってきて、共に巢離れして行った現在、不思議と淋しさはなく、肩の荷をおろした身軽さを感じ乍ら、ささやかな自らの楽しみを模索しつつ、我が子の健闘を静かに見守つて居る此の頃です。

## 語ろう！女たち

去年の参院選をきっかけとして生まれた「政治を変えたい女たちの会」が、さらに連帯を深め、持続させようと、一月二十八日、渋谷山手教会で集会を催しました。

各婦人グループからのアツピール、女たちの作った映画、ミュージカル、「思いのたけを語る出会いの場」として、熱気の充ち満ちた半日の催しでした。

何ら既成の組織がない女たちが女としての新しい視点から積極的に政治に関わって行く姿勢は、これまでになかった全く新しい動きと云えるでしょう。北から、南から泊りがけでやってきた主婦たちもありました。

参加のしかたは人さまざまですが、興味と意欲のあるかたはぜひ次の連絡先へ。

横浜市満北区高田町二七二六一九  
電話045-583-1311-377石井英子

## 本との出会い

わいふの会員でフリー・ライターとして活躍している永畑道子さんが、「二、三年のあいだの本との出会いをまとめています。

生活の中から湧きあがる様々な感想と、筆者の情感のゆたかさに色どられた「セピア色の本棚」。

単なる書評の域をこえたみずみずしさで、随筆としても楽しい読みものになっています。

本を読むのが好きなた、何を読もうかなと思っていらっしゃるかたには、最高の手引きの一冊になるでしょう。エポナ出版から出ています。

わいふ情報コーナーは、みなさんの情報伝達のために開かれたコーナーです。会員のどんなお声でも載せますので、ご遠慮なく声をお寄せ下さい。(無料です)

## 女たちの作る「たべものや」

無農薬野菜を使い、健康によい玄米料理、玄麦パンなど、自然の「味」を提供する女たちのくつろぎの場「たべものや」がオープンしました。西荻駅の近くです。

杉並区西荻北三ノ三ノ一四  
電三九九一八七九四たべものや

## 売ります

●三年使ったブリジストンの自転車(男用)売りたいと思います。  
二十六インチですので中学生向き。五段変速、アクセサリー及び鞆つき。中古ですので格安です。

## 譲って下さい

●織物の機械を譲って下さるかたありませんか。どんな種類でもかまいません。当方まったくの初心者です。

\*どちらにも連絡は編集部まで  
(二六九-二三三八)

# お能拝見

(その六)

## — 付<sup>つけたり</sup> 心得帖 —

和田好子

### ■なぜ「お能」というのか

なぜ能楽のことをお能というのか、鑑賞を拝見などというのか、ふしぎに思われた読者もあることでしょう。

「隣忠見聞集」は、徳田隣忠によって徳川中期に書かれた覚え書です。

隣忠は紀州徳川家のお抱え能役者で、老年に及んでから、一生の間に見聞した能楽界の内幕、役者の家系、芸談、舞台の印象などを書きしるしたのです。

たいへんおもしろい本で、豊臣秀吉や徳川家康も登場し、彼らが能の愛好家であり、ことに秀吉はいささかマニアに近かったありさまが活写されております。

この本の中で、お能と能は、はっきり書き分けられていまして、お(御)能という場合は大名や將軍の後援による上演、つまり費用丸抱えで、観客は入場料なんか出さない、

「御催し」なのです。

「御城(江戸城)御能の時」とか、「鶴姫様御能」などと書いてあります。

能という場合は、勸進能をさすのです。勸進能は、現在の言葉ならチャリティ・シヨウとでもいいましょうか。寺や神社が造営や修理のための募金の手段として、能の「座」(劇団)に公演をさせるのをいいます。

しかし「見聞集」を見てみると、どうも劇団の自主公演という感じが強く、劇団では金をもうけたとなると勸進能を計画するようにみえます。例の「能楽源流考」には、勸進能について、寺社と利益を分ける場合でも、演者に多額の収入をもたらしたので、宣伝にもなれば収入にもなる、まことに座にとつて都合な「催し」であったとあります。また、とくに後援者の大名などの許しを得て、収入のためだけの純然たる自主公演もあったそうです。

こういうのは、見る方はお金を払って見なければならな

いので、お能とも言わないし、拝見とも言いません。能を見物するという。

見せていただくときは御能拝見で、口ハである上にお弁当に御酒ぐらい下されるのですから、見物なんていうのは失礼にちがいない。

ですからお能のおはそもそもは敬語なのですが、現在お能という場合は、ていねい語であろうと思います。

今では大名家のお催しもありますが、お能拝見という理由もないわけなんです。私が能楽堂遍歴をしていたころ、能を見物にいきます。なんて人はまあありませんでした。どちらへ？ ハア、ちよつとお能を拝見に。というのがふつうでして、ことに女性は必ずさういいました。ていねい語は女性がよく使うものだから、敬語の内容がなくなっても、そういう形で残ったのでしよう。

現在の若い人は、なんといいのか、私は知りません。能楽を鑑賞に行きます、とでもいうのでしようか。

### ■ 分りにくいお能

さて、お能を拝見しようというとき、現代人の誰でもが危惧するのは、ちんぷんかんぷん、わからないんじゃないでしょうかということでしょう。

たしかに分りにくいものではありません。

もう故人ですが、私の伯母で、長年浜町で料亭をやっていた人がいました。この伯母の若いときからの知り合いで、遠い姻戚にもなるらしいのですが、新橋の有名な芸者があ

りました。プロマイドにもなったような美人で、私が幼いころ、銀座街頭で夏の昼間、まっ白なスーツにハイヒール姿の彼女に行きあい、母親があいさつをしている間、つくづくとその麗容を眺めた記憶があります。モダン・ガールの右往左往する銀座でも、その洋装は一頭地を抜いて美しく感じられました。

この人は、戦後やはり浜町で料亭を経営し、華やかな生活をしていましたが、ある日伯母から電話がかかってくる。「好子ちゃん、あんたはこのごろ、お能にくわしいそうじゃないか。Sちゃん(件の美人女将)が義理があつてどうしてもお能を見なきゃならないことになったんだが、分らなくて困るといつているから、案内してやってくれ」と頼まれたのです。

久し振りに会った元名妓は、もう四十才を過ぎているはずなのに、二十代といつても通る若さ美しさ、昔と変つていないのにびつくりしたものです。

連れだつて水道橋能楽堂へ行き、見たのは素人の会でした。彼女の義理のある人が「班女」を演じたのです。

そのときはつゆしりませんが、義理があるというも道理、この人は元大名華族、彼女の長年のパトロンで、二人の間には息子まであつたのです。ところが近頃、彼女は若い愛人をごしらえて、それが殿様に知れ、厄介なことになった。殿様と愛人と、人の見ている前でいい合いをするとしようなみつともない事件が持ち上り、私の伯母も成り行きを心配していたのです。

そういう状況で殿様が彼女を前に舞つたのが「班女」な

のでした。

「班女」は、狂女物で、愛人に裏切られた遊女が、狂女となつてきすらうが、最後にはめぐり合つて、めでたく結ばれるという話。

大名の殿様というのは幼時からお能を習っている人が多い。例の六平太も、幼いころ、祖父の弟子であつた殿様から、教授を受けているくらいで、才能があれば何しろ金とひまに恵まれて、十分なけい古をしますから、上手な人もたくさんいたようです。

班女の殿様も、めざましく上手というではないが、長年の習練とみえてすっかりしたりっぱな舞いぶりでした。

あとで思えば、つまり殿様はこの一曲で彼女を口説いていたわけなんです。

へよしなき人に馴れ衣の、日を重ね月は行けども、世を秋風のたよりならでは、ゆかりを知らずする人もなし。

とかこちつ、

へそれ足柄箱根玉津島、貴船や三輪の明神は、夫婦男女の語らいを、守らんと誓いおわします。この神々に祈誓せば、などかするしのなかるべき。

ふたたび愛の帰ることを祈っているのです。

私は謡本をわたして、読みながら見ることをすすめたので、彼女は神妙に舞台と本を見比べていましたけれども、「憂き人に別れしよりの袖の露」と謡う殿様を、この「末の松山波越えて、帰らざりし人」は、なんと思つていたものか、澄ましこんだ冷静な表情は少しも変わりませんで、終るとただ一言「ずいぶんお能にも、色っぽい文句がありま

すのねえ」  
と、それつきり。

けつきよく二人は覆水盆に帰らずで終わつたようですが、下々の者ならば、「おいらん、そりやア情なかるうぜ」(籠釣瓶花街酔醒(46頁註参照))と、逆上して百人斬にも及ぶべきところ、「班女」を舞つて見せるとは、さすがに殿様は違つたものではありませんか。

私が思うに、現代の観客とお能とは、ちょうどこの芸妓と殿様の関係みたいなもので、舞手がいかに熱演しても、見る方はさっぱり分らなくて、情に感ぜず、「へえ、こんなものか」程度のことが多いのではないのでしょうか。それはもう、西洋の音楽やら演劇やら、浮気の相手がたくさんいますから、古ぼけた昔々の恋人なんか、どうでもよくなつてしまふのはむりもありません。

註 三世河竹新七作の歌舞伎狂言。田舎大盡佐野次郎左衛門が、吉原のおいらん八ッ橋に通い詰めたが裏切られ、女を殺した上、捕まへにかかつた人々をもめた斬りにし、吉原百人斬と世を驚かした話。

### ■積極的理解のために

で、お能をおもしろく見ようというなら、あまり浮気のことなど考えないで、積極的に相手の気持を理解する努力が必要なのです。

つい五、六十年前に生まれた人をつかまえて、頭が古くつて話にならない、などといいますが、お能は何しろ六百年前の演劇ですから、見ええすれば分るというものではな



い。

六百年間の人心の変化はそうとうなもので、共通する部分よりは、変っているほうが多いくらいでしょう。

このことを勘定に入れて、積極的に出まさんと、せっかく入場料を払っての能見物で、こりごりするようなめに合います。

太平記に、貞和五年（一二三四九年）六月、京都四条河原で、盛大な勸進能が催され、貴賤の男女が「希代の見物なるべし」と押しかけた話が出ています。これは「棧敷くずれの田楽」といつて、有名な事件で、畠八十三間、三重四重の棧敷を組み上げ、ぎっしり見物人が詰まって見ているうち、あまりおもしろかったので、一同「こらえかねて座にもたまらず、あら面白や耐えがたやと、喚き叫ん」だ拍子に、棧敷が傾いて将棋倒れに倒れてしまい、大惨事となつたのです。

まったく危い話ですが、現代の人はお能を見て、「あら面白や耐えがたやと、喚き叫ぶ、なんて気持はちよつと想像できません。もつとも太平記の記述を見ましても、役者がお化粧して出てきたり、猿の面を掛けた子役が、橋掛りの欄干に飛び上り飛び下りしたなどあつて、今のお能よりずっと大衆的な感じはわかります。これは観阿弥の時代のことですが、その子世阿弥の貴族趣味によって再構成され、さらに江戸時代武家式楽となるに及んで、かなり高踏的になつたことはたしかですけれど、それでも昔の人は、「喚き叫ぶ」に近いくらい、お能に熱を上げたことは、「隣忠見聞集」にもうかがうことができます。

つまり現代人のわれわれには、理解できない部分が非常に多いというので、そこを準備によって補いませんと、おもしろく見るのはむずかしいのです。

### ■準備が必要

準備というと、すぐ約束ごとがわからなければという話が出てきて、いろいろな入門書にも約束ごとがたくさん書いてありますが、私の経験では、これはそんなに重要ではないように思います。

たしかに、前へ進むというときに、逆に後へ下つて見せるような演出ですから、約束ごとにも必要になってきます。



能作物(菊慈童)

しかし見もしないうちに、あれを憶えるのは苦痛以外の何ものでもないし、第一たいてい憶えられないでしょう。

それよりも、約束ごとがなぜ出来たか、くらいをおさえておいて、現物に当ってしまっただけのほうがかかりやすいはずです。おいおいいろんなことが憶えられるから、一回こつきりでなく、何度かくり返して能楽堂へ足を運ぶことのほうがたいせつです。

さて、約束ごとがなぜあるか、ですが、これは現代では、お能が象徴主義の演劇であるからだと一般にいわれています。

私としては……これは私の説ですから、おこがましくもはるかしくもあります、言ってみればあれは舞台その他の物理的条件によって、だんだんできてしまったもののように思われるのです。

創作されたころには、全国各地を巡業してまわる移動演劇ですから、当時はトラックがあるではなし、大きな舞台装置など運ばません。ですから簡素な作り物で間に合わすより方法がないし、せまい舞台、あるいは野外の仮設舞台でやるためには、何でも「ナニナニしたつもり」というより仕方なく、だんだん「つもり」がもつて約束ごとが出来ていったのではないのでしょうか。

いわば止むを得ざる象徴主義で、現代のそれとはいささか違うものではないかという気がするのですが……。

そう思ってみますと、案外よく理解できるといえるのが、私の体験です。

約束ごとは、まあ脇へおいといてよろしいとして、それ

ではどんな準備が必要でしょうか。

第一に、まず前の晩よく眠ってください。これは居眠りをふせぐためですが、あのテンポ、あの催眠的な音楽に抵抗するには、かなりの見慣れた人でも、寝不足では不可能です。

私も、前夜は必ず早寝を心がけました。

### ■必ず台本を

次に台本を前もって手に入れて、読んでおいてください。これがもつともたいせつなことで、筋書きを知っているとこの程度ではとても追い付きません。近頃は行き届いたプログラムが出て、台本がのっていることもあるようですが、その場でいきなり見るよりも、あらかじめ読んでおいて、舞台化された場合を想像したり、詞章の美しさを充分鑑賞したりしておくのがよろしいのです。

そしてその台本を、能楽堂に持って行って詞章を追いがらごらんになって下さい。

但しこれですと舞台が見づらい。

私も若いときには今と違ってもの覚えもよく、気力もありましたから、これぞと思う演能のときには、全部台本を暗記して見に行きました。

暗記しておけばたいそう舞台が見易いのです。能の台本は意外に短く、詞章は七五調で覚えやすいものですから、試みてごらんになるとよいと思います。

台本は近頃能楽全集とか、古典文学全集の一部という形

で出ており、行き届いた註釈がつき、おどろくべきことには現代語訳までついているのがあります。

お能の現代語訳なんて、まったく不可思議なもので、やらされた人の苦闘のほどがしのぼれますが、お若い方は古文に弱いから、ご参考になさるのもけっこうでしょう。

こういう本は買えばかなり高い、当節は入場料もばかにならない値段ですから、台本のほうは節約して、ご近所の図書館でお借りになるという手もあります。

どこで何のお能をやっているかという情報は、能楽タイムズという新聞があります。月刊だったと思いますが、神田の能楽書林（TEL 〇三一二六四・〇八四六）で出ております。これにその月の催しが（日本中各地のが）出ていますのでとても便利です。

お能に関する限り、行きあたりばったりに能楽堂に飛び込むという見方は、なさらない方がお得というもので、十分準備をして、芸術は創作者と鑑賞者との合作である、くらしいの意気込みでごらんになれば、きっと深い感興をお覚えになれると思います。

なんのためにそんな苦勞をして、昔の演劇など見なけりやならないのか、と呆れる人もあるでしょうが、現代はあまりに安易な時代です。

テレビなんかは占い者さながら、だまって前にすわれればそれっきりのもので、映画でも演劇でも、観客の努力などアテにしては不入りは避けられません。こういう時代の中で、私たちは創作者と芸術を合作するというような、積極的、創造的な喜びを忘れ去って暮しているのです。

それは文化の衰弱であると、私などは思います。  
「お能拝見」はきつと皆さんの心に、現代の失った何かをよみがえらせてくれることでしょう。 — 完 —

### 特集投稿のお知らせ

一五一号のテーマは「暮しの手帖の功罪」にきまりました。

「わいふ」の読者の中にも、「暮しの手帖」を愛読していらつしやる方がずいぶん多いと思います。すみずみまで心のこもった、暮しを尊重する生活誌として、私たち女にとって読みごたえのあるほとんど唯一の戦後の婦人？雑誌だったと云えるでしょう。

しかし「手帖」が女の生活に与えた影響が、いつも好ましいものだったかというところ、そうとばかり云い切れない面もあるようです。

花森さんは惜しくも亡くなられましたが、これを機会に、「手帖」が戦後、私たちに与えた影響を考えてみたいと思います。

「手帖」に教えられた点、役に立った点、反撥を覚えた点、みなさんそれぞれの記憶をお持ちのことでしょう。どうか歯に衣きせぬ率直なご意見をお寄せ下さい。ユニークな「手帖」論を展開しようではありませんか。

締切は三月五日。千二百字まで。  
多数のご寄稿を期待しています。

編集部

# エンピツとハガキ おしゃべり それだけで書ける



## 旧友に逢う思い

東京都  
安岡厚子

洋裁やフラワーデザインという手先を動かし、物を作ることはかりしていると、頭の中にか物足りないものを感じてくる頃、「わいふ」が届きます。一年半になるでしょうか。投稿は二、三回で、もっぱら読む方ですが、「わいふ」を手にとり、あれこれ思いをめぐらす時は、ペンも進むし（独白のようなもの）久しぶりに旧友と逢って、青春の思い出を語っているような錯覚に陥ります。又、「わいふ」の内容を語り合える近所の奥さんが出来たので、議論も又楽しそうとところです。「わいふ」の重味を感じている今頃は。

## テープでおしゃべりを

大津市  
中野桂子

昨年末、私の所属しております「網膜剣離友の会」の編集子A氏から「テープ（録音）」のおたよりをいただき、これは便利ないものだとさっそく私もお返事をテープで送ったの

ですが……。私たち目の悪いものには殊更ですが、その方の声を聞くということは文字よりはるかに親近感があります。それにお台所の用事をしながら「おたより」が聞けるなんてこれもすばらしいことでした。A氏の方は寒がりです。ふとんにもぐって（話して）下さったとか……。みなさんも一度おためし下さい。東京の秋葉原に、短時間用テープをお安く売るお店があるそうです。（これもA氏のおたよりから）

## 主婦の悩み

大分県  
養子雪子

主婦業に専念してはや四年。一人っ子も四才になり昼間は殆んど遊びに出かけるので私一人ぼっぴんとしています。こんな時私の頭の中ではいろんな思いが交錯し悩みもだえています。女って……主婦ってなに？ 毎日ただ日常茶飯事のくり返しで何を残すこともなくやがこの世を去っていくのかと思うと……。家庭内における進歩のない雑事のくり返し、社会的活動もできず、家庭にしばらく……。もんとんとした日々の連続です。でも終わりのない子育てとは申せある時期ほつとするに違いない。そんな時とめどもなくわきおこってくる知識欲を自身でコントロールできずもんとんとした日々を過ごすだろことは想像にかたたくない。そんな

な時に備えて何かをしなければと一念発起してかなりの月日が流れました。そんな中で地方新聞「大分合同新聞」で「わいふ」についての記事をみつけて飛びあがらんばかりに喜びました。というのも、何だか私の言いたいこと、言いたくても口で言えなかったことについて当を得た表現をしているようで感銘致しました。同じ考えの持主が世の中に多数いるときいて力強くなりました。と同時に私自身のもやもやを整理し、文章にまとめ得るべく系統立てる作業もしなくてはなりません。一方「わいふ」が、ロボットが長男にとって宝物であるように、私にとって宝物として、その存在を意識し始めたようです。

ところで、毎日家事のくり返しだからともんもんとしているだけでは能がありません。そうです。何かをしなくては。それは何か？それを発見すべく相当期間悩みました。友達にも相談しました。その度に「ぜいたくな悩みよ。家庭を、今の自分を大切にしない」と言われ、不満ながらも一見納得したかにみえました。しかし今はちがう。悩んだあけくの成果、産物、「わいふ」という強い味方を得ているいろいろ試みんと闘志をもやしています。

わいふの読者にも私と同じ体験者が多々いると思います。主婦とは？何をなすべきか？どうすればいいか？……などと悩んだ方々がどんな結論を得、そして今何をなすべきか、何が

生きがいなのか教えていただければ幸いです。

## 本と私

東京都

### 子松志乃子

一四九号の川名さんの投稿拝見しました。本のお好きな方がいらつしやると、うれしくなつてペンを取つた次第です。川名さんの仰るように、本についての意見や感想の交換が出来ると本当にうれしいと思うのですが。

私も子供の頃から本が好きでした。いつでもいろんな世界に入り込めるから、一人で空想にふけつていれることも多かつたようです。現在は五才を頭に三人の子供を持っていますから、自分の時間をとることはなかなかむずかしいのですが、早寝早起きを心がけて（なるべく昼寝をさせず、目いっぱい遊ばせる）夜は自由な時間を作ろうとしています。子供を公園で遊ばせながら、けっこう読むことも出来ます。

最近おもしろかつたのは、山本周五郎の「つゆのひぬま」「ちいさこべ」「おさん」などでこれは十代に読んだのですが、当時とは違つた味わいがありました。周五郎の人間を見る目の暖かさや、微妙な女心等が、十代では理解出来なかつたからかもしれません。同じ本でも読む年代や、環境によつて、違うものだなあと思つた次第です。それと、梅原猛の「水底の歌」、

「隠された十字架」「高松塚古墳」なども興味をひきました。

子供達にも本とは友達になつて欲しいと思ひ、親子で図書館通いをしています。

## もう一言

府中市

### 鈴木由美子 28

一四九号の編集後記で教えていただいた牧内節男さんの文を大みそかに入手して読みました。私の文は未熟だと思ひますし、あれが唯一の考え方とも思ひませんが、当時の新聞の切り抜きを取り出しながら、牧内さんの論旨をじっくり読んでみて、さほど納得できるものではありませんでした。

一つには「事実の客観報道には価値観は入らない」という基本的な主張はあまりにも陳腐だと思ひました。事実をどう取捨選択し、どのようにな構成するかで報道する人の考えがあらわれるのは当然のこと、マスコミに興味をもつ人々には常識化していることなのに、と感じます。数年前のこと、暮しの手帖誌でNHKニュースが困つた番組のトップに選ばれましたが、「我が愛の財界・自民党」とか「市民運動をやつてバカ」などと言ふ言わなくとも一般市民はそこに現れる価値感に拒否反応を示したのだ

とそんなことを思い出したりしました。

また、プライバシーが報道されるのはやむを得ない、新聞は節度をわきまえている」とありましたが、今のマスコミは気楽に個人のプライバシーを踏みじっている状況にあり、今後の人権感覚の進展と、報道される側からの抗議等で、その節度を十倍もきびしくしてもらわねばと思つた次第です。

他にもいろいろありますが、深いところで動揺させられるほどの論理は、何も見出せませんでした。社の管理職として、すでに報道されたものを守る立場にあつて、牧内さん自身束縛されていらつしやいますし、現在のところ、女性の側からの声を無視せず取りあげて反応を出すだけでも意味のあることだと思ひますので、この件にはこだわらず、もつと足もとをかためて別の機会に発言していこうと思つております。

### 主婦の価値に自信

柏市

徳光利子

「主婦をめぐつての論争」の中で、お若い方が「専業主婦は養われていることを自覚すべきだ」というのには驚きました。たとえ主婦の家事労働の価値が法的に認められなくても、その値打ちは大きな大きなものだと思います。ずい

つと先の将来、これが認められた時に、真の意味の男女同権と言えるのじやないかと思うくらいです。

とにかく我が家ではサラリー半分の半分は女房の働きと言つたり言われたりしているこのごろです。

### かけこみ投稿

京都市

新栄奈良江(60)

締切の日を錯覚して、二十日や二十日やと思つてゆつくり構えていました、もう一度見ましたら十五日の由、あわてて文章をまとめました。余談になりますが京都市内ですのに国道一号线に面していて会社、工場が多く、近くにポストもありませんので淀まで出ます。そのバスの一時間に一本というので困ります。それに乗り遅れないようにあわてて原稿用紙に書きましたので文章は勿論、文字にも自信がありませんので、編集部の方でよろしくご配慮下さい。

### もつと深刻な問題を

小田原市

田中道子

編集メンバーの年代がお若い故か、142号で日本のおばあさんをテーマにして以来、五十代過ぎの女の生き方を掘り下げて討論した記事にはあまりお目にかかつていない。人間の終着を見つめて本当の心の糧を見出すような、うわべだけでない心の慰めを訴えあえるものはないのか。記事だけの甘い表現に私は満足できない。

### 「わいふ」と私

東京都

原 弘子(49)

投稿できる主婦の雑誌であることを、毎日新聞の家庭欄で知り、すぐに「わいふ」を、お送り下さるようお願い致してから二年近くになります。初めはとも次号が待ち遠しい程でした。社会とのつながりを、多く持たない私には、毎回新鮮なものを感じて楽しく読んでおりました。しかし四十半ばの平凡な主婦である私には、正直いつて一寸しんどいと思うこともしばしばありました。家において平々凡々に過していることを何ら疑うこともない私には、何故この様なことを論議せねばならないかと感じたのです。そしてもう次の年は購読を中止しようかと考えました。けれど、井の中の蛙であり、思考力の

鈍くなりつつある私には、この考える主婦の雑誌は、社会への目を開かせてくれ、掘り下げて物を考え、広い角度から物を見ることを学び、年代の違う主婦の考えも手に取る様に分るという事に遅ればせながら気がついてきたのです。やはり「わいふ」は私にとって必要であり貴重な雑誌なのです。

何事も不精な私は投稿も始めてという愚け者であります。一昨年春より家庭の事情で筆を取る心の余裕がなかった為であります。長年住み慣れた土地でしたが、急拠移転の為の土地探しに始まり家を建て、引越をするという取込みがありました。

この五十三年の新春を迎えて、始めて投稿の筆を運べたことを、我ながら大変嬉しく思っております。編集に携わる皆様、会員の皆様、今後ともよろしくお願い申し上げます。

### 一四九号「おしやべり」の補足

柏市

#### 四方愛子

「出ていけ」（夫↓妻）と「安月給」（妻↓夫）についてですが、安いものを安いと言って悪いことはありません。ただ「安月給」だと文句を言うなら、夫に対してではなく、夫の会社に対して言うのがスジというものではないでし

ようか？ 主婦になるとどうもものけじめがつかなくなってくると私は常に（自己反省もこめて）思っています。こういうことにも表われているのではないのでしょうか。

### 考えるきつかけになる「わいふ」

栃木県

#### 平野秀子

先月「わいふ」をお送りいただきました平野です。毎晩、床にはいり子供たちの寝息をききながら読ませていただきました。

毎日がのんびりと「考えること」など忘れてしまったような私に、この「わいふ」は問題提起をしてくれました。たいへん身近な問題でありながら、むずかしい場合も出てきまして、私などすべて結構な話になってしまいます。これからも一人の女として、四人のわが子の母親として地域婦人の一員として考えていきたいと思っております。投稿までは、まだまだ先のことですが……。

### 言い難いことが

書かれている

名古屋市

#### 伊藤康子

わいふ149号をお送りいただきましたありがとうございます。言にくいことが集められているのも興味深く拝見しましたが（その所その場で解決できることはしたらもつと良いのでしょうか）医師の側の発言は簡潔にまとめられていて、示唆に富んでいますね。

良いお仕事をと祈りしています。

### 深刻な現実

仙台市

#### 岩田真砂子

仙台市内の内職あつせん所の前は、朝早くから雨の中を、子供を背おい、さらに手をつなぎ、荷物をかかえる女性の長蛇の列が今日も続いている。

中には、生活保護を受けている人もいます。

内職は少ないし、希望者は多い。そして、生活のためではなく、育児から解放されひまになった人たちが、割のよい仕事をとってしまうこともあるという。

賃金が悪くとも、仕事があればよい方だとも云う。

もし、私が、内職をしたとして、その分飢える子供が現実には、まだまだ沢山いるということだ。行政の貧しさばかりでは、割りきれないことではあるまいか。

## 子どもか仕事か

東京都

### 早乙女光子

「やりたい事をやればよい？」田中様のご意見、私の心のうちを吐き出してくれた感じですが、本当に、実際に、やってこられた人には（本人たちは必ず否定しますが）協力者がいたのです。

そうでなければ、縫田よう子氏のように「私は仕事のために子供はやめた」のです。

## 書く気はあつても

東京都

### 井筒式子

お正月過ぎて、わいふ149号読むことができませんでした。

セピロ買いたいのだが……となぜか気がねをしていた亭主でしたが、セピロの正体を読みとめて役に立ち喜んでおります。

次号の子育ての特集には私も挑戦して書いてみたいのですが、残念ながらとても文にならないのです。どうして皆様はあんなに書けるのでしょうか。文章の基礎講座を勉強したい心境です。

## お知らせ

継続ティーンでの主婦論争、そろそろ論議が出つくしたように思いますので、次号で打止めにしたいと思えます。締めくくりとして、これまでの論争の内容の整理もかねて、公開座談会を行ないますので、どうかふるってご参加下さい。

日時 三月二日 午後一時半—四時  
場所 東京都教育会館 地下鉄東西線  
神楽坂下車（飯田橋寄り出口）

徒歩一分 赤城神社ヨコ

\* \* \*

二月十一日から編集部が左記に移りました。今後のご投稿または電話でのご連絡その他は新住所におねがい致します。

東京都新宿区二十騎町十八 林慶子方  
〒162 電話（〇三）二六九—二三八八

\* \* \*

封筒から宛名の紙が貼がれて返送されてきた149号が一冊あり、どなたのか不明ですので途方にくれています。150号を受けとられた方の中、149号が未着のかた、至急ご一報下さい。149号は「産む性から医師へ」です。当方の手落ちのためご迷惑をかけて本当に申し訳なく存じております。どうぞよろしく。

## 編集だより

▼暮、正月のせわしない時期にかかって心配しましたが、予想に反して嬉しいヒメイをあげるほど沢山のテーマ原稿が集まりました。しかもそれぞれに本音の溢れた、読みごたえのあるものばかり。こういう時こそ、編集者の醍醐味を味わいます。

▼コミュニティの崩壊した現代社会の中で、どれほど子育てがむずかしいものになっているかつくづく考えさせられた150号でした。安心して子育てを営める社会環境が崩壊してしまっていることを痛感します。本当に人間的な連帯のある豊かなコミュニティを、どうすれば作り上げて行けるのか、気の遠くなる課題です。

▼発行の遅れを取り戻すために、原稿締切日を各号少しずつ早めています。次回は三月五日です。どうぞよろしく。  
(編集部)

（わいふ）150号 一九七八年一月二十五日発行

編集発行・わいふ編集部・東京都新宿区二十騎町十八林方 ☎二六九—二三八八・二六〇—一五五〇〇  
定価三五〇円年間予約六冊一八〇〇円送料七二〇円  
振替東京五—一〇四三〇 わいふ編集部  
印刷（株）イワタ印刷千代田区富士見一ノ二ノ二五



# 大月書店

性の昏迷をこえて愛の再発見を問う！

# 愛の復権

江守五夫著 切り離された《愛》と《性》

絶賛発売中 古い価値観が崩れさるなかで生じた「性解放論」と性の氾濫。人間性をも歪める今日の状況を直視しつつ、愛と性が長い歴史のなかでたどってきた道すじを詳しく明らかにし、現代こそ、愛を土台にした男女の絆が結ばれることを訴える。



●四六判カバー装 九〇〇円

元始、女性は太陽であった

平塚らいてう自伝 ●全4冊 各二〇〇円

平塚らいてう 愛と反逆の青春

小林登美枝著 二二〇〇円

婦人の生活と文化

宮本百合子著 国民文庫／三〇〇円

戦後日本女性史

伊藤康子著 一四〇〇円



永畑道子

# セピア色の本棚

四六判上製 価一、三〇〇円

095-00015-0673

新聞記者時代、母親雑誌編集者を経、現在、雑誌「教育の森」その他に健筆をふるうかたわら、実証的な教育評論家として全国を駆けめぐっている筆者が、五年余にわたって雑誌「青年」誌上に連載した、若者、特に若い女性、母親へのためのユニークな読書論。

折にふれ筆者の琴線に触れた五十冊の本との出逢い。ある時は現代社会への心底からの怒りとなり、またある時は文学の世界の甘美なロマンに酔う。

「生きるということ」を真剣に考える世代に贈る、良識の書！

## 好評発売中！

全国の書店でお求めください。万一品切れの場合は、直接小社へ御注文ください。



# E.ポナ出版

東京都新宿区岩戸町二六  
神楽坂セントラルビル  
☎(03)二六九一―二五―三(代表)  
振替 東京七―三四三七―一 下162

## 考える主婦のための投稿誌

既刊号 特集

- 138 天皇とわたしたち
- 139 日本の夫
- 140 家事を洗い直す
- 141 親のきたみち  
子どもの行く道
- 142 日本のおばあさん
- 143 主婦とウーマンリブ
- 144 なぜ結婚するのか
- 145 こどもを預けるとき
- 146 母性とは何か
- 147 女と政治
- 148 ニューファミリーの実体
- 149 産む性から医師へ

定価 ￥350